

た。而してこれがライブニッツの思想史上に於ける重要な效績の一であつて「理性」の哲學の成立に對して重要な意義を有する。

デカール學徒もロックも共に生具といふ語をば生れながらにして意識される「又は時間上經驗に先だつ」といふ意に用ゐて居る。デカール學徒は此意味に於て所謂生具表象の存在を主張した。但し斯る意味に於て生具表象の存在を主張することはデカール自身の本意ではなかつた。此生具觀念の創設者たるプラトーンと雖も決して斯る意味に於ての生具觀念説を説いたのではない。デカールと雖も決して例へば嬰兒が神の觀念や因果律といふが如きものゝ明確なる意識を有すると信じて居たのではない。デカールの生具といふ語の意味は唯理性が經驗に依らずして自身に發展し得るといふことに外ならぬ。即ち彼は生具觀念は思考能力其者より生起すると見たのみである。「生具觀念なるものはない、何となれば生具の者は常に現存せざる可らざれば」と云ふホッブスの攻撃に對してデカールは「觀

念が吾々に生具するといふに當て吾々はそれが常に吾々の心中に現はれ居るといふことを意味せず、蓋し斯る意味に於ては生具觀念は決して無かるべし、否な吾々は唯之を發展すべき能力を吾々自身の内に有するといふことを意味するのみ」と言つて居る。デカールの生具をば生れながらに意識すると解して彼をば經驗論者の攻撃の好標的たらしめたのは寧ろデカール學徒の誤つた解釋に基く。併しデカールが生具といふ語を不正確に用ゐたが爲めに、又た意識と精神とを同視して無意識の精神生活を認めなかつた爲めに、斯る解釋を招かねばならぬやうになつて居るといふことは否定することは出来ぬ。而してロックは此の如く解せられたる生具觀念説を反駁して、嬰兒が感性經驗に先つて神や因果律の表象を意識するといふことは想像し難いではないかといふが如き理由に據つて一切の生具觀念の存在を否定した。ライブニッツ亦た此の如き意味の生具表象の存在は否定する。併しながらライブニッツはロックに反對して、表象は外的印象より生

起せずして理性の自發的所産であるといふ意味に於て悉く生具的であると説く。彼は、所謂純粹表象は其れに先行せる感性表象よりして發展し來るものであると説いて、一切の感性表象に先ちて存するといふ意味に於ての純粹表象の生具性を否定する點に於てはロックと同一であるが、併し純粹表象が感性表象より發展するは其れが既に感性中に潛在的又は可能的に素質として含まれて居るからであると見て其生具的なることを主張する。ライブニッツの生具的とは經驗に先ちて意識されるといふ意ではなくして、單に理性其者が自發的に産み出すといふ意に過ぎぬ、従つて感性經驗より發展し來ることを妨げぬ。併し此の如く感性經驗より發展し來るところの純粹表象の生具性を維持せんが爲めには其感性經驗其者が生具的なることを許さねばならぬ。而してライブニッツの「モナド」論は之に對して最都合よき根據を與へるのである。「モナド」に窓なし。外界との交渉は絶對的に不可能である。感性經驗と雖も「モナド」自發的の所産である。即ちラ

イブニッツの意味に於て生具的である。吾々の表象は所謂純粹表象も感性表象も皆な生具的である。經驗論者の題句「豫め、感官に在らざりしものは知性中には一も存せず」*Nihil est in intellectu, quod non antea fuerit in sensu* は眞である、併し吾々は之に「但し知性其者を除く」*nisi ipse intellectus* といふ制限句を附加へねばならぬ、とライブニッツが説いたのは即ち之を意味する。

而してライブニッツは斯の如く「モナド」の自律を説くと共に他方、多數「モナド」の間に成立つて居ると彼れが考へた「豫定調和」の概念に訴へて、表象の超個人性に形而上學的基礎を與へた。「モナド」の一切の表象は其れが絶對的に獨立に自己の内より創造し出すものであるが、而かも其れが同時に世界認識たり得るは何に依るか。曰く、凡ての「モナド」の間には豫定調和が成立つて居る。「モナド」は其表象の明晰の度をば異にして居るが、併し其内容は悉く同一である。其故に「モナド」の表象は全然その自律的所産でありながら同時に自己以外の實在と一致する。即ち吾々は此豫定調和に基いた

「モナド」の表象といふ概念に於て、個心内に於ける超個心的機能の概念、即ち吾々の意味に於ける「理性」の概念の素質を認むることが出来る。

もつとも、ライブニッツの「モナド」自律観は充分徹底しては居ない。其「モナド」の自律性は絶対的のものではない。第一に、ライブニッツは無数の「モナド」の外に是等の「モナド」を造化した、彼が「諸モナド」の「モナド」と呼んだ超越神の存在を認めた。ライブニッツに依れば、「モナド」は神の造化である。而して神の奇蹟は又た之を破壊することが出来る。其有するところの自律は神によつて賦與されたる自律である。無数の「モナド」間に存する調和は神に依つて豫定されたる調和である。ライブニッツの此「モナド」自律観の不徹底は、彼が神祕説や「理性」の哲學の中心觀念をば中心觀念としながら而も之とは調和し難き正統説と妥協せんとした結果に外ならぬ。第二に、ライブニッツによれば各「モナド」の活動及び發展は全然自發的であつて他の「モナド」の影響の結果ではないが、併し其發展の各状態又は各段階は其前行の状態又は

段階に依て絶對的に決定せられて居る。此點よりしてライブニッツの「モナド」論は自律的決定論 *autonomischer Determinismus* と呼ばるのである。ライブニッツの「モナド」は一が他の影響を絶對的に受けぬといふ意味に於て絶對的自由を有するけれども、因果的必然といふことに反對の意味に於て的自由は有して居ない。而して此「モナド」自律観の不徹底も亦た彼が神祕説や「理性」の哲學の中心思想とは反對の方向を取つて居る自然科学の考へ方に支配された結果である。(因果的必然観は自然科学的の考へ方の必然の結果である、第二篇参照。)ライブニッツの思想は、彼がその生れた時代よりして受けた制限と、其調和的傾向(ライブニッツは哲學史上に於ける最典型的な調和的天才である、彼れは哲學と神學、機械觀と目的觀との調和を試みたのみならず、更に内在的目的觀と超越的目的觀との調和、舊教と新教との調和而して更に進んでルター教會と改革教會との調停までも試みて居る)との結果として斯の如く二段の不徹底を含むで居るのであるが、併し此不徹底

の裡に於て尙ほ「モナド」の自律と認識の内面化とが斯の如く高調され、主観的觀念論と理性の概念の萌芽とが此の如く著しく現はれて居るといふことは注意を値する。英佛の思想家に對する彼れの特異性は、前に述べたロック及びデカール學徒と彼との比較によつて明かに看取されると思ふ。

## 五

斯くて吾々は、カント以前に於て獨逸を代表する最獨創的思想と見らるべき獨逸神祕主義及びライプニッツ哲學と他の國を代表するところの思想前者に對しては英國に起つた經驗論、佛國の教會派神祕主義、以太利を中心とする自然哲學及び祕法、後者に對しては佛及び蘭のデカール學派及び英のロックの哲學とを對比することに依て、精神の自律性と創造力と認識又は真理の内面化とを高調するといふことが、カント以前の獨逸思想の中心特徴をなして居るといふことを知り得た。「理性」の哲學は此中心觀念がカン

トの紆餘曲折を極めた細心な研究に依て學的に精鍊されて初めて明確なる形を取るに至つた者である。今内的及び外的の證材に依て是等の先行思想とカント哲學との關係を細かき點に互つて明かにする暇はない。(神祕思想とカント哲學との關係に就ては本篇第一論文は無論、并に第一篇參照) 又た此中心觀念が如何にして學的に精鍊されたかを精叙する餘裕もない。此處には唯、吾々の題目に必要な程度に於てカントの思索の結果のみを叙説するに止めて置く。

吾々の題目に重要な關係を有する範圍に於てカント哲學の主要點を擧ぐれば、第一に、從來經驗や功利や神意や啓示や形而上學的豫想やに基いて説明されんとしつゝあつた科學、道德、宗教、及び美學上の原理をば理性の先天的基礎の上に置くことに依て、是等の文化をば、經驗や功利や神學說若くは形而上學說の變動やに依て動かされざる強固な基礎の上に置き、絶對の價値を之に與へんとしたことである。第二に、此目的を達せんが爲めに唯理

論派間に嘗て漠然たる意味で用ゐられて居り、而して一度ライブニッツに依りて改修された先天的、天賦的、又は生得的 (a priori, angeboren, innate) の概念をば更に改修し、更に明確にしたことである。先づ第二の點より着手する。

第一に、カントは凡ての表象が先天的であるといふライブニッツの思想を取らない。凡ての表象が先天的であるといふことはライブニッツの場合に於ては前に述べたやうに「モナド論」といふ形而上學的豫想を背景として初めて成立して居るが、併しカントは認識論の出發點に於て一切の形而上學的豫想や心理學的豫想を排したから、此の如きことを許すことは出来ぬ。又た、所謂先天表象が經驗表象よりして發展し出るといふことも同様の理由に基いてカントは承認しない。併しカントの場合に於ても先天的 (カントは *angeboren, innate* の語を用ゐずして専ら *a priori* の語を用ゐた) とは時間上經驗に先だつといふ意味でないことはライブニッツの場合と同様である。カントの先天は心理的先行といふことゝは全然別である。或表象や命題

が先天的とされるといふことに對しては、それが時間上經驗に後れて意識されるといふことは毫も差支はない、或は更に、經驗に依りて或は經驗を機會若くは縁として意識に上るといふことも毫も妨げとはならぬ。カントが先天的であるとした數學上の根本命題や因果律や實體恒存律やが經驗の助を借りて、經驗を機會として意識されるといふことはカントも否定しない。是等の命題が先天的であるといふは唯その確實性が經驗に基かぬといふ意味に外ならぬ。先天的を斯る意味に解すれば、先天的は必然的及び普遍妥當的 (即ち超個人的) と一致し、後天的は偶然的及び個人的と一致する様になる。何故かなれば、經驗は時と處と人々に依りて異なり得るから、後天的なものは必然的で普遍妥當的であり得ない、偶然的で個人的である。即ち、若し必然的で普遍妥當的な概念や命題があるとすれば、それは先天的でなければならぬ。然らば斯の如き必然的で普遍妥當的なことを要求するものがあるか、若しありとすれば其れは何であるかと言へば、其れはカン

トによれば眞善美の三者である。吾々が眞と稱する判断が他の偶然的な表象結合と異なる所以は、其に必然性と普遍妥當性との確信又は要求が伴ふ點にある。吾々が或行爲や執意を善と稱し、或對象を美と稱する場合は利害好惡感性的の快不快適意不適意等と異なる點も亦た同様である。若し我は斯の如く思惟するが他はさう思惟せぬとも構はぬ、我は之を善と見るが他は之を惡若くは無記と見るとも構はぬ、我は之を快と感ずるも他はさう感ぜぬとも構はぬといふ様に考へられるならば、それは眞に眞善美に關する判断とは言へぬ。併し眞善美に關する判断が斯の如く必然的で普遍妥當なることを要求する以上は、其れ自身必然的で普遍妥當的な何等かの原理に基いて居らねばならぬ。即ち、若し偶然的の表象結合や利害好惡や適意不適意や異なるつた眞善美の可能を認めるならば、吾々は斯の如き必然的で普遍妥當的な原理の存在を認めざるを得ぬ。而して此の如き原理は前に述べた理由に依つて人間精神の先天的機能に基礎を有するものでなければならぬ。

でなければならぬ。

カントは斯くして眞善美、或は科學、道德、宗教、及び藝術等の文化に、不確實にして轉變的な功利や、經驗や、神學的又は形而上學的豫想以外の確實な基礎を與へんが爲めに、個人意識を以て出發して而かも其奥底に存するところの必然的な、普遍妥當的即ち超個人的な機能、即ち吾々の限定した用語法に従つての「理性」の作用を探究した。カントに依れば、此「理性」に根柢を有する「理性」自らが與へる、先天的な自律的な法則に基いて、科學、藝術、道德、及び宗教等の文化は成立する。「理性」は理論的としては自然界の立法者である。實踐的としては道德界の立法者である。感情の形を取ては趣味界の立法者である。與へられたる雑多の感覺が認識の先天的な超個人的な機能によつて加工せられ、按排せられ、科學が成立つ。科學は所與の模寫に非ずして「理性」が其固有の法則に従つて所與を整理したもの、に外ならぬ。道德も亦た「理性」に外的な、即ち他律的な權威(例へば正統的基督教が教へるやうに

神の意志や、ホッブス一派が説いたやうに國家の命令といふやうな根柢を有するものでもなく、又た英國經驗論者の多くが説くやうに功利といふやうな經驗的基礎の上に立つものでもない、理性自らが與へるところの當爲の法則に依て自然生活を統御し整形し行くことに依て成立つ。而して此の如くして統御整形されたる生活が、此法則の立法者又は維持者としての神の概念と結付いたものが宗教である。藝術も亦た外的自然の模倣でもなく、又は自然生活の使役に服せんが爲めに生れ出でたものでもない。天才の神祕なる創造力によつて直觀の對象が人をして無關心の快感を惹起さしめるやうに改造せらるゝことに依て成立つ。

要するに、科學も、道德及び宗教も、藝術も、人間精神の先天機能、即ち理性の自律的立法に基いて成立つ。即ち文化は超個人的主觀の創造である。而してカントの批判哲學の目的の全體が此超個人的主觀即ち「理性」の研究である。但しカントは其道德論及び宗教論に於ては主觀の圏域を踏み出で

て主觀の所産以外の眞在の世界、主觀を支配するところの大道、此大道の立法者たる至上存在といふやうな形而上學問題に進み入つた。併し此場合に於ても彼れの主觀論的傾向は其著しき特徴として存して居る。カントに依れば、吾々の理性が主觀の所産以外の世界を認めねばならぬといふ理由は、其理性其者の内の外に發見することは出來ない。理性が何等かの宇宙の大法——大道に服従するといふ信仰も、畢竟理性自身の原理に屬するのである。此信仰も亦た批判哲學の立場から言へば、理性其者の普遍的必然的の形式によつて決定さるゝ様な形を取らなければならぬ。カントによれば、學的理性は自ら産み出したものゝ外は普遍的及び必然的に認識することは出來ない。之と同じく行的理性も亦た自ら普遍的必然的な仕方と與へるところの大道——大法の外には順依し服従することは出來ない。吾は大法に従ふと言つて居るが、併し其れは矢張り自律に根柢を有せねばならぬ。従つてカントによれば、吾々をば吾々を支配するところの或至上

權威と關係せしめるところの宗教と雖も、畢竟理性の先天機能の基礎の上に立てられたものでなければならぬ。

六

斯くてカントは彼れの所謂「理性」の批判によつて人間精神の知意情の三面に互つて超個人的機能を探究し、而して之に基いて文化に、經驗や功利を超越した、或は神學的又は形而上學的豫想の變動に伴ふて動搖する恐のない、確實なる基礎を與へんとした。此點に關するカントの事業は一言で言へば文化の批判的基礎づけ (kritische Begründung) であるといふことが出来る。之に對してカント直後のカントの正系的繼承者及び發展者を以て自ら任じた、而して又大體上しか見られ得べき所謂思辨的唯心論派の事業は文化の形而上學的基礎づけ (metaphysische Begründung) である。

此派に屬する代表的思想家、フイヒテ、シェリング、ヘーゲル、シュライエルマッヘル

等の哲學は前に述べたやうにカント哲學が批判的の「理性」の哲學と呼ばれ得るに對して形而上學的である。彼等は皆なカントが発見した文化の創造者としての「理性」を形而上學化し、絶對化して宇宙根柢の位置に高めた。カントの人間理性をば神的理性又は宇宙理性の位置に進めた。但し此の如き發展の素質はカント哲學中に已に存して居り、之に「ロマンテラク」思潮やスピノーザ哲學の復興といふやうなことが勢援して哲學史上空前なる「理性」の形而上學の最盛期を現出したのである。此の發展の徑路に就いては第一篇參照。

文化の創造者としての「理性」を宇宙根柢と見たことの最直接的な、而して重要な結果は、一切の萬有が文化の創造又は實現に對して必然の意義を有するといふことである。「理性」が宇宙根柢である以上は、文化の創造、實現といふことが最高の宇宙目的 Weltzweck であつて、自餘一切の現實は此最高目的に對する手段又は前階 Vorstufe でなければならぬ。其故に、此派の哲



學者は各自その最高の文化、又は最高の宇宙目的と見るものに對して各現象の占むべき必然の位置を示すといふことを其哲學の主要課題とした。例へば、フイヒテに取ては感覺界は彼が最高の宇宙目的(而して宇宙は此目的の爲めに存するから此宇宙目的は同時に宇宙根柢である)と考へた道德の實現の方便であつた。フイヒテに依れば、道德的活動は障礙を克服打破して精神の自由を實現し行くことに依て成立つ、克服打破さるべき障礙がなければ道德は不可能である、即ち大乘佛教の教へるやうに煩惱を滅するは菩提の種子を焚盡する所以である、感覺界及び其誘惑は實に此障礙として理性自らが産み出したものである。シェリングに對しては最高の宇宙目的は藝術の享樂及び創作であつて、而して例へば物質界に於ける機械作用、磁氣、電氣、及び化學作用、有機作用等、精神界に於ける感覺、知覺、抽象、意志等の諸精神作用は、皆な此目的の實現の前階であつた。ヘーゲルに對しては彼れの所謂絕對精神、即ち藝術、宗教、及び哲學、殊に第三者が萬有發展の最高段階で

あつて、例へば自然に於ける天文現象、理化現象、有機現象等、人事界に於ける道德、法律、家族、社會、國家等の人事現象は、藝術、宗教、哲學等の最高文化を實現せんが爲めに辨證法的發展上缺くべからざる前階である(後の「獨逸思想と軍國主義」參照)。

フイヒテに依つて情熱的に唱道され、ヘーゲルに至て哲學的に基礎づけられ、今日に至るまで獨逸に勢力ある「文化國家」Kulturstaat の思想は「理性」の形而上學の此共通特徴に哲學的背景を有して居る。「文化國家」の觀念を喚起すに強き機會を與へたものはナポレオン戰役後に於ける當時の獨逸の國情であつた。カント哲學が其後繼者に依て宣傳せられ發展せられ始めた第十八世紀末より第十九世紀初の約十年間は獨逸文運の最盛期であり、而かも同時に獨逸國運の一大危機であつた。一方に於ては、此時期は恰かもワイマールに於てゴーテ及びシルレルの二詩星を中心として多くの詩人、文藝批評家、殊に所謂新浪漫派の文士が集まつて獨逸文藝運動の中心とな

つて居た時であつて、クロップシュトック及びレッシングに端を開いた獨逸文藝の隆運は此時實に頂點に達して居たのであつた。而して他方に於てはカント哲學はイエナを中心として宣傳し始められ、フイヒテ、シュリング、ヘーゲル等の大思想家はカント哲學を發展しつゝ自家の見を立て、等しくイエナ大學を初舞臺として思想上の旗揚げをなし、而して一八〇六年イエナがナポレオン軍に蹂躪せられしを限りとして哲學運動の中心はイエナを去つたが、併しそれは又徐々に伯林に移り、フイヒテ及びシュライエルマッヘルが此處に思想上の指導者の位置に立ち、伯林大學の創立が畫せられ、次でヘーゲルが其の講壇に立ちて獨逸の思想界を風靡する素地が造られたのである。然るに此間に於ける獨逸の政治上の状態はどうであつたかといふに、フイヒテが其の説いた宗教觀によつて有名な「無神論々争」を惹起して宗教及び政治社會より烈しき攻撃を受け、イエナを去つて伯林に轉じた一七九九年は恰かもナポレオン一世が武力を以て五百名議會を解散し自ら執政となつて一切の政事上

の實權を掌握するに至つた年である。次でカントが世を辭した一八〇四年はナポレオンが帝號を稱し、列國の軍を破つた年である。ヘーゲルが其處女作「フノメノロギ」の稿を了つたのは獨逸の十六州ライン同盟を組織してナポレオンの保護を乞ひ、而してナポレオンはプロイセン及びロシア征討の爲めに獨逸を蹂躪した一八〇六年である。斯くて獨逸人は、彼等が永き間にはぐみ育てた文化に對する高き自信と深き自覺とを喚起しつゝありし時に際して其國は小邦分立して統一を缺き恨を飲んで其邦土を敵騎の蹂躪に委ね、ばならなかつたのである。此際に立つて、獨逸は將來世界を支配すべきその固有の文化の爲めに舉國一致其邦土を護り國運を張らねばならぬことを勸奨した最有力な思想家はフイヒテであつた。

併し斯の如き當時の政治状態は唯「文化國家」の思想を喚起する機會にすぎぬ。此の如き一時的の政治状態といふことを離れて、國家は一般に、其自身に、特に文化と密接なる關係を有するとされねばならぬ理由があると考

へて、哲學的基礎の上に「文化國家」の思想を置いたのがヘーゲルであつた。即ちヘーゲルは其哲學體系に於ける辨證法的發展の次序上、國家をば絕對精神(即ち哲學、宗教、藝術)の次位に置いて、文化擁護の最重要なる職能を之に配與した。(當時の獨逸の國情とヘーゲルの文化國家の思想とに就ては後の「獨逸思想と軍國主義」中に述べてあるから此處には詳叙しない。)

七

ヘーゲル死(一八三一年)後前世紀末までの間にあつては、獨逸哲學に於ては大體の傾向より言つて他國より移植された思想、或は少くとも獨逸が他國と同様に有するところの思想が優勢を占めて、獨逸特有の「理性」の哲學は唯僅か傍系として辛うじて命脈を維持するに過ぎなかつた。其最優勢を占めた思想は、第一に、前にも述べたところの、英佛及び印度思想の感化の下に成立つたショーペンハウエルの厭世哲學、及び之を繼承したハルトマンの

哲學であつた。次は功利及び經驗の哲學である。ヘーゲル派より出でて唯物論に轉じたフイエエルバッハに端を開いた宗教哲學上の人性論派、即ち人間の物質的欲望に基いて宗教を説明せんとするもの、ベントム及びミルの影響を受けて功利主義の倫理を説くもの、快樂論的美學、思惟の經濟に依つて認識原理を説明せんとするプラグマティズム風の認識論——是等は前世紀中葉以後獨逸に於て少なからざる勢力を有する思想であつた。此哲學に依つて道德、宗教、藝術、科學等の文化は其尊嚴を奪はれて唯の物質的生活の方便と見られ、唯物論と自然主義との跋扈を誘致した。此間獨逸固有の「理性」の哲學は如何なる形を以て存して居たかと言へば其重要なものに二種ある。其一は經驗哲學と妥協するもの、フヒネル、ロツツェ等は其代表者である。此兩家は共に自然科学より哲學に轉じた思想家であつて、自然科学の結果をば哲學的世界觀の基本材料として用ゐながら、其世界觀其者は「ロマンティック」期の理想主義の哲學と類似した者である。第二はカント哲學中主

として認識論を研究發展して専ら此時期に於て最大勢力を有つて居つた自然科学の基礎を考查せんとした初期の新カント派である。斯くて獨逸固有の「理性」の哲學、理想價値の實現としての文化の哲學はヘーゲル以後は傍系として存するに過ぎなかつたが、然るに前世紀末より現世紀初に互つて、此論文の初に述べた様に、或者是批判的の形を以て、或者是形而上學的の形を以て復興し來つた。現代の所謂新理想主義は即ち其れである。(ヘーゲル以後新理想主義の勃興に至るまでの獨逸思想の變遷に就ては後の「獨逸の現代哲學と其最近背景」參照。又た現代の新理想主義に就ては第一篇中に、全般に互つてはなく主として私自身が傾いて居る思想に就ては、あるが、一通り叙説してある、少くとも功利及び經驗の哲學に反對する新理想主義の根據は其中に明かにされて居ると思ふ。)

獨逸には自然科学上の大發見者はないといふ評語は當つて居るかも知

れぬ。獨逸はニュートンやダーキンを有たない。併ながら、マイステル・エックハルト、ヤコーブ・ボーム、ライブニッツ、カント、フヒテ、ヘーゲルは全く獨逸自身のものである。而して是等獨逸固有の思想家の中心觀念は、精粗、明確、明確の差はあるが、超個人我或は理性の自律といふことである。而してカント以後に於ては此觀念は常に文化に基礎を與へ、功利や經驗やの侵害に對して理想を擁護する爲めの最高の訴庭となつて居る。

英國人の標語は「自由」詳しく言へば政治的自由である。獨逸人の標語は「文化」である。獨逸人も自由を尊重しないではない。しかしながら其の高調するところの自由は政治的自由でなくして、内的自由、文化に於て實現さるゝところの精神的自由である。斯くて英國は夙に立憲政治の發祥地となり獨逸は宗教改革の郷土となつて居る。自由の意識の發展をば精神發展の中心標準と見たヘーゲルは言つた、國家の法律制度の上に於て如何に自由が完全に實現されても、それは自由の最高發現といふことは出來ぬ、精

神が國家の法律、制度といふが如き外的のものに依存する間は、それは尙ほ依他的 (Beihandensein) である。従つて眞誠の意味に於ける自由を得たといふことは出來ぬ。精神は內的に、即ち其れ自身に依つて (Beisichsein) 初めて眞誠の自由を獲得しうる。此の內的自由は即ち藝術、宗教、哲學の絶對的精神である。と後の「獨逸思想と軍國主義」(參照) には實にクラシカルな獨逸精神を最適切に言ひ表はしたものである。對ナポレオン戦争以前の獨逸に於ては、兎角文化の愛、藝術、哲學等を離れがちであつた愛國尙武の精神(獨逸思想と軍國主義)參照と文化の愛とを結付けて、一方國家に對して個人の自由を比較的によく制限し、比較的によく犠牲にする(これは獨逸に於ては英佛兩國に於けるが如く政治的自由に對する要求が過激な形を取つて現はれて居らぬといふことに依ても知られ得る)ことに依て強固なる國家を組織し、他方其基礎の上に獨逸文化の隆興を企圖するといふことは自由戦争前後に於ける獨逸先達の士の眞摯なる願望であつた(獨逸思想と軍國主義參照)。

人若し獨逸が軍事及び教育の制度に於て諸外國の模範となつて居るといふことゝ、英國が長い間の民衆の反對を排して初めて獨逸の義務教育制度を採用することを得、而して義務兵役制度に至てはロバート元帥一派の多年の熱心な唱道ありしに拘らず、而して今次の歐洲戦亂に於て自國の志願兵制度の不利益と弱點とが明かとなつたに拘らず尙ほ自由の名の下に之に對する反對の聲を絶たざることゝを對比するならば、此點に關する獨逸精神の特徴は明になると思ふ。「文化國家の觀念と、而して之と關聯して、獨逸は他の文明民族に比して遙かに優秀なる文化を有するが故に此文化を擁護するため優勢なる國家を有せねばならぬといふ信念とは、今日に於ては單に獨逸に於ける一部の學者や政治家の主張であるのみならず、明確又は漠然の差はあるが、頗る廣く一般民衆に行渡つて居る信條であり抱負である。而して此觀念と信念とは實に其根柢を獨逸の理性の哲學、文化の哲學に有し、而して獨逸の理性の哲學、文化の哲學は又た此の如き獨逸精神

近世に於ける「我」の自覚史 附録 獨逸思想と其背景  
を背景として成立つて居る。

### 三 獨逸思想と軍國主義

#### 一

獨逸に於ける文藝及び哲學の最盛期は第十八世紀末期より第十九世紀初期に互つての間であるが、此間に於て獨逸に於ける思想上の主要中心地はワイマール、イェナ、及びベルリンの三地であつた。

ワイマールにはゲーテ及びシルレルの二詩聖を中心として詩人、戯曲家、文藝批評家、殊に所謂新ロマン派の群星が集まつて居つた。ワイマールを政治的首都とするザクセン・ワイマール大公國の唯一の大學市たるイェナは、ラインホルドがカント哲學の宣傳者としてその大學の講壇に立つてより、獨逸に於ける最初のカント運動の中心となつて、大體上カント哲學の

正系と見做され得べき觀念論的、理想主義的の大形而上學的體系の發祥地であつた。ラインホルドを介してのカント哲學の發展たる、カント哲學の正系的繼承者を以て自ら任ずる、而して大體上しか見られ得べきフィヒテ、シェリング、ヘーゲルは皆な此大學に於て講壇の初舞臺を踏み、思想上の旗揚げをなして居る。

此ワイマール及びイェナの二中心に於ける獨逸の想華は、一七九〇年代より第十九世紀の最初の五、六年、即ち一八〇五年のシルレルの死、若くは一八〇六年のイェナ戦争の頃までを最爛漫期として居るが、ベルリンが獨逸思想の主要中心となつたのは其れよりは稍後期に屬する。即ち、其端はフィヒテが所謂「無神論々争」に於て宗教社會と衝突を起してイェナを辭してベルリンに轉住し、「ロマンテイク」の領袖シュレーゲル兄弟、ティーク、シュライエルマッヘル等と結んで此地の思想界の牛耳を執り始めた頃に開けたといふことが出来る。併し端は其處に開けて居るが、ベルリンが思想上獨逸の覇權を握るや

うになつたのは更に後期に屬し、一八一〇年ベルリン大學が創始せられてフィヒテが其第一の公選總長となつてより、或は更に後れて、一八一八年ヘーゲルがハイデルベルクより聘せられて其講壇に立ち獨逸の思想界を風靡するに至つてより、彼れの死（一八三一年）に至るまでと見ることが出来る。

斯の如く思想史上に於ける獨逸の最盛期は、大體上ワイマール及びイェナを中心とする時期と、ベルリンを中心とする時期との二期に別たれ得るのであるが、獨逸思想が國家主義及び軍國主義と密接に結付くに至つたのはベルリン期に於てであつて、ワイマール及びイェナに於ては、文藝も哲學も國家や軍國主義とは寧ろ没交渉に發達し、興隆して居る。殊に、國家に個人を超越した意義と目的とを認むるところの國家主義（私は以下之を超個人主義的國家主義と呼んで、國家の意義は認めつゝも之をば個人の方便として存在すると見る個人主義的國家主義と區別する）と軍國主義とを哲學說の内容とするに至つたのはイェナ退去の遙か後のヘーゲルを以て初めとする（フィ

セテは此時期に於ける熱烈なる愛國哲學者として知られて居るけれども、哲學上の超個人主義的國家主義者ではない、之に就ては後に説く。尤も、ヘーゲルの國家主義的傾向はイェナ時期よりして既に現はれて居る。ヘーゲルも最初は青年期壯年期に於ける當時の多數獨逸思想家と等しく佛國大革命の刺激を受けて強き民主主義的傾向を示して居つて、獨逸(羅馬)帝國がラインの左岸を佛國に讓與したと同年(一七九八)にフランクフルトに於て書いた政治論(其郷國ヴュルテンベルヒの憲法改正を論じたもの)に於ても尙ほ此傾向は著しく存して居るが、ナポレオンの保護の下にライン同盟が形造られ神聖羅馬帝國が滅亡するや、以前(一八〇一年—一八〇三年)にイェナに於て書いた政治論の中には、獨逸が政治上の不統一と軍備の不整頓との爲めに其の最美しき最豊穰なる領土の少からざる部分を失ひ、幾多の同胞が外國の法律と習俗とに支配されざるべからざるに至つたことを慨し、非常なる情熱を以て獨逸帝國全體に於ける中央集權の必要、軍制及び財政

の統一改善の必要を切論して居る。併しヘーゲルが超個人主義的國家主義及び軍國主義を其哲學體系の内容としたのはイェナ退去の遙か後、即ちハイデルベルク在任期に端を開き、それが明確な形を取て現はれたのはベルリン轉任後である。

斯くてヘーゲルの巨腕によつて初めて超個人主義的國家主義と軍國主義とは明確なる學的の「イズム」となり、哲學的基礎の上に立つに至つた(感情の形を以てはそれ以前に已に著しく現はれ居る、これは後に説く)のであるが、併し斯の如くして出來上つた哲學上の超個人主義的國家主義及び軍國主義は吾邦の通俗の言論中に屢誤解されて居る様に、單に權勢の擴張や領土の擴大や、經濟上の富の増殖のみを本領とするものではなくして、文化の擁護を目的とする所謂「文化國家」Kulturstaatである。前者の様な現實主義的な、唯物主義的な國家主義が思想上主張され辯護され、且つ實生活に於て勢力を得るに至つたのはヘーゲル以後、即ち獨逸思想のクラシカル時期以



後に屬する。即ちそれは、一方ヘーゲル哲學其者の發展の結果として、他方自然科学的思想の影響の下に、唯物論的現實主義的思想の跳梁となり、之と關聯してカール・マルクス、エンゲル等の唯物史觀が起り、ショーペンハウエルに端を開いた排理想的主義說や、最近に於てニーチエの君主道德說等が之に勢援し、政治上に於てはビスマルクの極端なる露骨なる主義的軍國主義的政策が之と相呼應した結果であるといふことが出来る。以下、今略述した思潮變遷の徑路を少しく精細に考査して見たい。

二

前に述べた獨逸思想華の最盛期は、實生活の上より言つて國家の盛運とは全然沒交渉に、却て國家生活、政治生活の衰運と結付いて開けて居る。而して其文藝なり哲學なりの思想内容より見ても亦た、當初は、其以前よりして獨逸の主動思潮であつた超國家的思想と結付き、超國家的傾向を有して居

た。私は此處で非國家的と言はずに特に超國家的と言ふ。非國家的といふ語は一般に非常に廣義に用ゐられて居つて、例へば學者は一般に非國家であるなどと言ふ人があるが、併し之は非國家的といふ語の濫用であると思ふ。此語は特に國家を咀ふとか、國家的生活を嫌惡するとか、若くは學理上其存在の理由を否定するとかいふ場合、例へば古代に於ては「ソフィスト」、「キニーク」、「ストア」、及び「エピクローロス」諸派の大部分の思想、近世に於ては「マックス・スタイルネル」の思想等の如きものに特に適用するが至當であつて、唯國家に無頓着なこと、即ち實際生活上國家に對する情熱を缺くとか、若くは思想上國家に對する關心を缺くとかいふことを示す語としては、超國家なる語が寧ろ穩當である。而して第十八世紀の獨逸思潮は前者に屬せずして寧ろ後者に屬する。

第一に實生活に就て見れば、三十年戰役以後ナポレオン對する獨立戰爭に至るまでは獨逸は全體としては全然統一を缺き、内部には小邦分立して、

國家として最無勢力な政治上最無能の状態にあつた。而して斯く國家として政治上無勢力であつたといふことが頓て或程度まではその文運の勃興を助けて居る。即ち、獨逸は第十八世紀に入つて、三十年戰役とルイ十四世の侵略とより受けた瘡痍漸く癒えて國內は小康を得、國民は多少生活上の餘裕を得て來たのであるが、併し當時の國情は此餘裕の活動力を政治上の公生活に發展する機會を彼等に與へなかつた。即ち生活上の餘裕を有する才能あり教養ある人士の多くは公生活に開展さるべき才能を内生活に向けた。外的活動の世界を離れて只管藝術を樂み哲學宗教上の思辨黙想に潛心した。即ち最尊き意味に於ての遊戲生活、遊民生活に耽つたのである。第十八世紀末期より十九世紀初頭に亙つての獨逸思想上の最盛期、クロップシュトック及びレッシングよりワイマール及びイェナに於ける文運の隆盛期に至るまでの獨逸思想の大發展は大部分は其成果であるといへる。

三

次に思想の内容に就て見ても、それは國家とは殆んど没交渉であつた。第十八世紀に於てゴータ及びカントに先だつた時期に主として獨逸を支配して居つた思潮は大體二つの全然正反對の方向を取つて發展して居る。一は普遍主義的又は通性主義的と名くることを得べく、他は個人主義的といふことが出來やう。當時の文藝及び哲學の關心の中心となつて居るものは個人生活に關する問題か、若くは人間といふ種全體に亙つた通性的本領に關する問題かであつて、其中間に位する國家の問題は殆んど注意を惹かず、國家の意義は殆んど認められて居らぬ。

此時期の獨逸思潮の大勢を支配して居つた主流は所謂啓蒙思潮であるが、此獨逸の啓蒙思潮は英佛のそれに比して多少の特殊相は具へては居るが、併し重要な根本特徴に於ては其れと一致して居る。而して其根本特

徴の一は主理的であるといふこと、而して其結果として其考へ方が非歴史的であり、而して其自然の結果として歴史の産物たる國家を輕視するといふことであつた。啓蒙思潮は「ルネッサンス」以來の自然科学的思潮の影響を過度に受けた結果、自然科学の思考法を無制限に適用せんとした。其結果一切の事物に、普遍的な、必然的な、永恒不變な關係を發見することを唯一の學問の本領と考へ、而して單に之をば認識の唯一の對象とするのみならず、唯一の價值あるものと考へ、之を以て生活をも律せんとしたのである。例へば、啓蒙哲學者の多數は、人間の理性に具有さるゝ普遍、永恒、不變の理法に基ける理性教を説き、之をば唯一の眞宗教と見、時代や民族の特殊相を具へた他の一切の歴史的宗教をば全然僞宗教として排斥した。彼等によれば、人類が原始に有して居た宗教は理性教であつて、他の一切の成立宗教は其れの墮落したものである。政治に關しても亦た同様の考へ方が適用された。啓蒙期の思想家は熱心に人類全般に互つた、時處を離れた人間の本性、

本領、及び歸趣を論じたが、歴史的な、特殊な形を取て現はるゝ國家の意義は殆んど認めて居らぬ。彼等に取ては、普遍的な、永恒不變なるものが獨り自然的で理性的で價值あるものであつて、凡ての特殊な、歴史的な、時間的な、變遷的なものは不自然にして、人類の本領の發展を妨害するものであつた。

併し此主理的な、普遍主義的な啓蒙思潮の主流の底には主情的な、個性主義的な一道の暗流があつた。此暗流は「ルネッサンス」以來歐洲の全體に互つた偏局的な主理的普遍主義的傾向に對する反動として、個人之要求、個性の價值を高調して起つたものであつて、それが初めて明確な形を取て表面に現はれたのは佛のルッソーの思想である。此ルッソーの主情主義の唱道を端緒として、第十八世紀後半に於ては、普遍を偏重して冷知を以て一切を律せんとするところの啓蒙的主流と、個性を偏重して感情に無限の價值を置くところの非理性主義的主情的傍流とが並行して成立つて居つたのである。

當時思想上に於て獨逸の先輩であつた佛國に於て前者を最よく代表したのはブルテールであり、後者を最よく代表したのはルッソーであるが、獨逸に於ては前者はラルフ一派の唯理論哲學に依て最よく代表され、後者は、シュトゥルム・ウント・ドラングの文學によつて最よく代表されて居る。斯く啓蒙思潮時期には其主流と之と全く正反對の方向を取つて居る傍流とがあつたのであるが、併し國家の意義を認めなかつた點に於ては双方共に同一である。主情思潮は冷知を賤しんで感情や情熱の價値を高調したけれども、其感情や情熱の對象は個人的生活(例へば藝術の享樂とか戀愛とかいふ様なこと)であつて、國家生活や民族的生活ではなかつた。

此超國家的傾向は、理性主義と非理性主義、冷知と感情との反對を結び付けたと認められて居るカント及びゴッテ(カントは此反對を峻別並立せしめて双方の境界を明確にすることによつて、ゴッテは之を合一融和することによつて)に至るまで大體變つては居らぬ。ゴッテがナポレオンに對する

態度に於て愛國的氣概を缺いて居ることは廣く知らるゝ事實であつて、此點に於て彼が愛國心に乏しいといふ一部の人の譏は到底免るゝことは出來ない。其思想の内容に就て言つても、彼は學說及び信仰の統一に基いた政治的團體といふ意味に於けるプラトーン流の理想的國家の觀念は有つて居たが、併し歴史の所産たる、時代的民族的特殊相を具へた國家に對しては深き同情を有つて居らぬ。又た國家が個人を超越した旨趣や目的を有するといふ思想も彼れにはない。

カントは、獨逸に於て最も早くより國家的觀念が旺盛であると稱せられ、軍國主義的傾向に富んで居つたプロイセンに人と爲り且つ終生プロイセンの領土に於て學を講じた學者であるけれども、其思想には著しき國家主義的傾向もなければ軍國主義的傾向もない。其政治論は第十七世紀以來英佛に専ら行はれて居た契約說、即ち一種の個人主義的國家主義であつて、而して軍國主義に反對して「永遠の平和」の理想を説いた事を以て有名であ

る。もつとも、カントの國家論は英佛の其れとは主要な點に於て異なつて居る。第一に、カントは國家は人民の契約に基いて成立つと見るのであるが併し所謂契約をば、ホッブスやロックやルッソー等の如く歴史的事實と見ない。唯社會的關係の正否を判斷すべき理性原理又は理念(Idee)と見るのである。即ち全體としての人民が自己に對して決定せざることは治者は之を人民に對して決定してはならぬといふ規則によつて一切の法律の正否は判斷されねばならぬ、といふにある。従つてカントの契約説は彼れ以前に於ける英佛の其れの様に國家の史的或は社會學的起原に關する學説でなくして、常に國家の根柢に存せざるべからざる理性原理又は理念を示したものに外ならない。而して此の如き契約説と伴つて又たカントの政治論の嚴肅主義的理想主義の様相が成立つて居る。治者の尊重すべきは結果でなくして意志である、爲政の標準は人民の幸福や安寧でなくして其自由でなければならぬ、治者は、たとひ其爲政的行爲が人民の幸福を誘致すると信ず

る場合と雖も、其意志に反し其人格を無視して之を幸福にする權利は有たない、法の起原は自由にあつて幸福にはない、治者の擁護せざる可らざるものは幸福でなくして自由である、とカントは考へた。此點に於ても亦たカントの政治論は從來の英佛の功利主義的、快樂論的政治論に正反對の傾向を示して居る。斯くてカントの政治論は、國家の目的を個人の利害得失禍福以上に置くことによつて從來の英佛の功利主義的契約説の政治論よりフイヒテ、ヘーゲル等の文化擁護の機關としての國家といふ思想即ち「文化國家」の觀念へ進む過渡段階を代表して居るといへるが併し國家と個人と何れが目的で何れが方便であるかと云へば、矢張り國家方便説であつて、國家に個人以上の目的を認めざる點に於て尙ほ從來の民約説の攀籠を脱して居らぬ。カントに取つては、國家は英佛の契約論者の説くが如く個人の幸福の方便ではないが、併し矢張り個人の爲めに存する者には相違ない。カントは又た前に述べたやうに國民間の「永遠の平和」の理想を説いた點

に於て明かに非軍國主義的傾向を示して居る。無論カントも此理想が今直ちに實現され得ると見るほど空想家ではなかつた。併し彼は人類は事實上次第に之に近づいて進みつゝあると信じ、而して此理想の爲めに努力するといふ事は一切の道徳的人の眞摯なる義務でなければならぬと考へて居る。若し之をば、かの萬有の根柢に反對の闘争を認むる辨證法に基いて戦争の哲學的辯護をなしたヘーゲル哲學や、優勝劣敗を普遍的の生物的現象と見る見地から戦争を辯護する生物學的戦争辯護論や、一將功成萬骨枯をば人生當然の眞相と見るニーチエ流の君主道徳説より見れば、痴人の夢に過ぎない理想であると言はねばならぬ。

四

斯くて第十八世紀の獨逸は、實生活に於ても思想上に於ても著しく超國家的傾向を有つて居つたといへる。上世末期に於ける「ストア派」エピク

ロス派や、ヘーゲル以後のマックス・スティルナーなどの様に積極的に國家的生活を嫌惡若くは輕蔑し、若くは學説上其存在の理由を否定するのではないから之を非國家的といふは不當であるが、併し實生活に於ても思想上に於ても國家に對する關心と情熱とを缺いて居る。無論思想家の多數は國家の意義を否定せず、學理上國家の意義を説いては居るが、併し其國家は個人の爲めの國家であつて超個人的の意義や目的を有して居らぬ。即ち大體の傾向上超國家主義的であつたといふことが出来る。然るに第十九世紀に入つて、カント及びゴッテの後繼者中に、強烈なる國家的感情及び國家主義的思想の勃興すべき事情が起つた。其事情の第一は即ち、ナポレオンの侵略に依て獨逸が蒙むつた慘禍が超國家的思潮其者の中に醗酵されて居た「ロマンテイク」的情熱を激擾したことである。第二はカントの思想が、これも亦た一方に於ては「ロマンテイク」思潮と、他方に於ては約一世紀の間異端邪説の汚名の下に迫害の標的となつて居つた末、恰かも第十八世紀末に至

て獨逸詩人の間に復興されたスピノーザ哲學と結付いた結果、絶對的唯心論に發展して、國家に超個人的意義を與ふべき基礎を供給したことである。先づ第一の事情より述べやう。

第十八世紀末より十九世紀初に互つて、獨逸に於ける前に述べた主理的啓蒙思潮と主情思潮とは殆ど主客の位置を顛倒して來た。普遍的法則を遍重する主理主義を排して感情に絶對價値を置くところの「ロマンテイク」の傾向が一時思潮の本流を支配するに至つた。併し此の主情的思潮の關心の中心は尙ほ第十八世紀初期及び中葉に於けると同様個人生活にあつた。然るに共和政時代よりして獨逸が蒙むりつゝあつた佛國の壓迫は第十九世紀に入つて益甚だしきを加へて、ヘーゲルが憤慨したやうに、祖國の最美はしき最豊穰なる部分は佛國の領有に歸して幾多の同胞は父祖以來慣れ親しんで來た風俗習慣、法律を棄て、他民族のそれに服従せねばならぬ様になつた。而してあくまでナポレオンに敵對して其防戦に力めた

プロイセンが屈辱を忍んで城下の誓をなさなければならなかつたのは言ふまでもなく、ナポレオン側に附いて其保護を受けたライン同盟の諸國と雖も佛兵の通路に當つた地は非常なる苦き經驗を嘗めたのである。此地方は恰も日露戦争當時に於ける滿洲若くは假りに目下の歐洲戦役に於て獨逸の中立違反に無抵抗であつたと想像された白耳義の様な位置にあつたのである。即ち其地は普佛兩軍の戦場と化し、田園は鐵蹄に蹂躪せられ、市街は兵燹に罹つた。殊に當時の教養ある人々に最痛切なる苦痛を與へたことは、彼等の鬱勃たる精神的精力の唯一の安全瓣とも見らるべく、又た唯一の精神的慰安場とも見らるべき學問藝術の生活が之が爲めに大打撃を受けて、彼等が多年間愛育して來た獨逸文化が一時佛兵の鐵蹄の蹂躪に委せられたのみならず、更に永遠に荒廢に歸するに至りはせぬかといふ患を起さしめたことである。之に就ては多くの事例を擧ぐるを要しない、若しイェナ戦争前後に於て當時の代表的哲學者の講學がナポレオン戦役の爲

に如何に阻碍されしかを見れば充分であらう。處女作「フェノメノロギー」の原稿を前にしながら書窓より佛兵の發砲を目撃したと傳へらるゝヘーゲルは間もなく佛兵の掠奪に遭つて當座の凌ぎに窮し、ゴエテは其友クネーベルンに彼れに「十圓以内の贈與を委託して居る。而してイエナ大學は財政上の打撃を受けてヘーゲルは其講壇を退かざるを得ざるに至つた。是より先きにイエナを去つて居たフイヒテは、冬はベルリンに於て自由講演を開き、當時尙ほベルリン大學創立以前である、夏學期はエルランゲン大學に於ける講義を依頼されて居たのであるが、後者は戰役の爲めに唯一學期のみを以て中止となり、而してベルリンが佛兵の手に落ちるに至つてフイヒテは其支配に服するを快しとせずして此處を去るべく餘儀なくされた。シュリングも亦たイエナ戰争後大學維持の困難が原因となつてヴュルツブルク大學の教授の位置を棄てるべく餘儀なくされた。シュライエルマッヘルも亦た同一の理由に依てハレ大學の講壇を退かざるを得なかつた。即ち當時講學上

の最活動期にあつた代表的哲學者は皆な痛切に生活上、講學上、戰敗の苦き經驗を嘗めたのである。是等は唯哲學者中より取つた顯著なる事例に止まるが、併し之によつて他の凡ての方面の學藝に従事する多數の學者も亦た同様の災厄に罹つて居るといふこと、而して之に伴つて又無數の學生が修學の機會を奪はれて居るといふことを容易く察することが出來やう。斯の如きみじめな境遇に獨逸を沈めたものは何であるか。即ちヘーゲルが此戰敗以前に既に説いて居るやうに、獨逸の政治上の不統一と軍備の不整頓の爲めではないか。獨逸人は其祖國が精神的自由の郷土、宗教改革の發祥地であるといふ大なる誇を有して居る。尙ほ又た三十年戰役の爲めに約一世紀ほどの立後れとなり、次でルイ十四世の勢威に壓迫せられて政治上に於ては久しく無勢力であつたが、併し第十八世紀末期に於ける其文運は歐洲に於て比類なき隆盛を極めて居る。政治上に於ては無勢力であるが、併し精神的文化の上に於ては大なる誇と大なる抱負とを意識して



居る。即ち超國家的氛圍氣の裡に生れ出で、其れ自身超國家的傾向に富むところのカントの哲學やゴータの詩はおのづから精神的に獨逸民族を統一する「セメント」となつて居る。然るに政治上の無勢力の爲に彼等の唯一の誇たる此精神的文化までも外敵の蹂躪に委して荒廢に歸せしめねばならぬといふみじめな境遇に陥つたのである。是に於て個人生活を關心の中心として居つた「ロマンテイク」の情熱は翕然として一時國家に向つた。即ち積極的には自己の文化に對する獨逸民族の深き自覺、消極的にはナポレオンに對する敵愾心、此兩者が「ロマンテイク」の情熱と結付いた結果として、愛國詩人や愛國哲學者の空前の輩出となつたのである。

## 五

併しながら、斯くして起つた國家的思潮は初の間は専ら感情の形を取つて居た。その國家主義は未だ學的根據の上に立つて居らぬ。ゴータ及び

カントの直後に出でた多くの愛國詩人、例へばテオドール・コルネル、モーリッツ・アルント、マックス・フォン・シエンケンドルフ、フリードリッヒ・リッケルト、ハインリッヒ・フォン・クライスト等は皆な此範疇に屬する國家主義者である。哲學者側より出でた熱烈なる愛國者として有名なフヒテは哲學的の國家論を説いては居るが、併し其の哲學的國家論はカントに比して更に個人主義的契約論的の傾向に富んだものである。(フヒテが國家論を説いた「自然法基礎論」Grundlage des Naturrechts nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre, 1796 はカントが國家論を説いた「法理學の形而上學的基礎」Metaphysische Anfangsgründe der Rechtslehre, 1798 より前に出で、居る。其後フヒテの思想には多少の變遷はあるが併し其根本傾向は變つては居らぬ。)フヒテによれば、國家は各個人の有する三天賦權利、即ち身體の自由、財産の所有、肉體の保存の三權利を擁護せんが爲の方便機關にすぎぬ、各個人に固有なる此三天賦權利が毀損された場合に之を擁護せんが爲には其毀損者を強制する事が必要である。

此強制實行の機關が國家である。尤も、フイヒテの所謂三天賦權利其者は其れ自身本原的のものではない、フイヒテの所謂「絕對我」個我を超越した、個我の根柢となつて居るところの「絕對我」の本性より派生、演繹されたものである(如何にして派生さるゝかは此處に説く暇は無いが)から、個人を本原的のものとする見地から立てられた英佛の從來の契約説とは此點に於て根本的に性質を異にして居るが、併し個人と國家とを對立せしめて、其本末主伴を定めんとする場合には、フイヒテの國家論はあくまでも個人は目的にして國家は方便であると見るのである。即ち其哲學的國家觀は依然として個人主義的國家論であると言はねばならぬ。斯くてフイヒテの思想には超個人主義的國家觀は未だ明かに現はれて居ないが、併し國家をば文化擁護の機關と見る思想は其「自然法基礎論」以前の書よりして已に鮮かに現はれて居る。此思想が最有力に現はれて居るのは「自然法基礎論」に先つこと三年に出でた「佛國革命論」, Beitrag zur Berichtigung der Urtheile des Publicums über die

französische Revolution, 1793 であつて、此書に於ては彼は反覆して、文化が國家結合の唯一の目的であるといふことを力説して居る。無論倫理的唯心論者たるフイヒテに取つては最高の文化は道德的活動に於て實現さるゝ精神的自由である。

國家對個人の主伴關係に關する從來の思想を根柢より破壊して徹底した超個人主義的國家主義を説いたのはヘーゲルである。ヘーゲルの超個人主義的國家論は儼然たる哲學的基礎の上に立つて居る。此哲學的基礎——絕對的唯心論——は前に述べた様に大體カント哲學の發展と、ロマンティック思潮とスピノーザ哲學の復興との協同の結果と見らるゝのであるが、併し今その「如何にして」を述べる暇はない。唯、國家が一方に於ては個人に對して、他方に於ては精神的文化に對して如何なる關係に立つかといふことに關するヘーゲルの思想を一通り叙説することは、本論の目的に對して切要である。

六

ヘーゲルによれば萬有は理性—宇宙理性—の辨證法的發展である。自然も此發展の一段階である。宇宙理性は自然の段階を経て、第一に個人精神即ち彼れの所謂主觀精神に、次に彼れの所謂客觀精神に、最後に絶對者の自己認識、即ち有限者が無限者に歸つた段階、即ち彼れの所謂絶對精神、即ち藝術、宗教、哲學の三者に發展する。而して國家は此發展段階の中、家族及び彼れの所謂「社會」(Gesellschaft)と共に客觀的精神の一段階を形造る。此三者に於ては個人は客觀的の一般意志に服從して居るが、併し其服從は法に於けるが如く單に外的行動のみでなくして内心よりの服從である。個人は自己の意志に即して團體の意志に合致して居る。吾々は家族、社會、國家に於て初めて眞誠な意味に於て共同生活に入るのである。

然らばヘーゲルの所謂「社會」とは如何なるものであるか。ヘーゲルが「社

會」と國家との間に差別を置くところに彼れの國家論の重要な特徴の一が存する。「社會」とは、ヘーゲルによれば、多數個人が自家の利害上法律若くは規約を設けて執政機關を立つるところの團體である。ヘーゲルは其實例として瑞西を擧げて居る。國家とは之に反して國民精神によつて統一されたる有機的渾一體であつて、論理的には個人に先つものである。「社會」と國家との性質を混同して、國家をば多數個人の契約に基いて成立つものであると見て、其目的をば個人の生命、財産、幸福の保護にありとするは近世の國家觀、殊に英佛に於ける國家觀の一般傾向であるが、併し國家は個人の機械的集合ではない、却つて個人は國家の内、に於て初めて眞の人として存在することを得るのである。個人は任意の意志に依て國家の成員となるに非ずして、國家の成員として初めて眞の意味に於て個人たり得るのである。若し國家の目的が單に個人にあるとすれば國家の爲めに個人の生命幸福を犠牲にして顧みない戦争の如き全然無意義となり了らねばならぬ。

個人が國家の爲めに其生命と幸福とを犠牲にするを辭しないのは、而して他も亦た之をば崇高なる道義心の發露として稱揚するのは、國家自身が個人以上の目的を有し、其興敗存亡が個人の禍福生死以上の意義を有するが故であると見ざるを得ない。「社會」に於ては個人は目的にして全體は方便である。併し國家に於ては個人は方便にして全體が目的である。家族は其成員の個人的目的をば全體の目的に委棄したる小團體である。「社會」は成員の個人的目的を基礎とする大團體である。國家は此兩者の綜合であつて、成員の利害を擧げて全體の目的に委棄するところの大團體である。家族を支配するものは愛であり、社會を支配するものは利であり、而して國家を支配するものは國民的精神である。斯くてヘーゲルは個人對國家の關係に就てはブライトンと等しく明確なる超個人的國家主義を説いた。併し、ヘーゲルによれば、國家は其れに固有なる文化を代表することによつてのみ存在の理由を有する。一時代に於ける最強の國家は必ず其時代

に於て辨證法的意義を有する所の一定の文化を代表して居る。歴史は過去の國家と將來の國家との鬭争の連續であるが、此鬭争に於て或國家が敗亡するといふことは頓て、其國家の代表して居る文化が偏局的であつて従つて之に反對する文化を代表する他の國家が興つて之に代らねばならぬといふことを意味する。之が即ち歴史の辨證法である。歴史は人事現象中に働いて居るところの論理である。皮相的な歴史家より見れば、歴史は單に國家が勃興し、繁榮し、衰滅し、民族が相争ひ、軍隊が相衝突した跡に過ぎないけれども、一切を理性の辨證法的發展と見る汎理論的立場より見れば、是等の國家、民族、軍隊の背後には彼等に依て代表さるゝところの文化が論理的發展を營んで居るのである。城堡、砲臺の背後には「理念」の戦争が行はれて居る。斯る立場よりしてヘーゲルは平和論者に反對して戦争の哲學的意義を認めた。又た生命ある固有の文化を有せざる、即ち「理念」を代表しない様になりつゝあるところの國家をば、他の高等なる生命ある文化を

有するところの國家が滅ぼし又は併合し得べき文化史的權利を承認した。斯の如く、國家の興敗存亡は其國家が代表して居るところの文化の辨證法的運動を表示して居るから、國家は之を組織するところの個人に對しては無限の權力を有するけれども、其れが代表するところの文化に對すれば矢張り前階に過ぎぬ。個人は國家に對して方便であるが併し其國家は又た最高の精神的文化、即ち藝術、宗教、哲學、即ちヘーゲルの所謂絕對精神に對して方便である。客觀精神の最高段階たる國家が互に相衝突して興敗存亡相繼いで居る間に、絕對精神即ち是等の國家によつて培養された藝術、宗教、哲學は不朽に存続する。國家としての猶太は今も亡びて居る。併し其民族の造出した一神教は永遠の眞理として殘る。國家としての古希臘は亡びた。併し其の造出した科學、哲學、藝術は人類不朽の至寶として残つて居る。是等及び其他の國家は、只管自己の生存と優勝とを直接の目的として努力しつゝあるが、併し其れは皆な絕對精神の發現の器械に使はれて居

るのである。絕對精神の發現を目的とするところの宇宙理性は生存又は優勝に對する國家の情念ライデンヤフトを利用して自己の使役に服せしめつゝあるのである。ヘーゲルは之を「理性の狡智」*List der Vernunft* と呼んだ。斯の如くしてフヒテに依て情熱的に唱道された「文化國家」の觀念はヘーゲルに至つて哲學的基礎の上に立つに至つた。

ヘーゲルに依れば精神の本領は自由にある。精神の發展は即ち自由の意識の漸次的發現である。主觀精神の發端より客觀精神の頂點に至るまでの發展は畢竟自由意識の漸次的發展に外ならない。最幼稚の段階に於て精神は無意識の間に、即ち自己保存、自己主張、自己擴張の本能といふ形を以て自由の要求を起す。此本能は漸次發展して、自由を有するは單に自己のみでない、自由は凡ての人によつて要求せられて居るといふ意識に進む。此意識に基いて法が起る。是に於て精神は無意識にして尙ほ自然の束縛に支配せられて居るところの本能の状態を脱して一段高等の自由に進ん

なのである。併し法は單に外的行爲のみに於ける個人意志と一般意志との一致であつて内心よりの一致ではない、即ちそれだけ精神は尙ほ束縛の状態にあるのである。家族、國家に至て初めて前に述べたやうに個人意志と一般意志との眞誠なる相即は實現さるゝ。而して國家にも種々の形式がある中に於て、ヘーゲルによれば、自由の發展は其最高形式たる代議的君主制に至て其頂點に達するのであるが、併し此政治的自由の頂點は未だ精神發展の頂點ではない。世の政治萬能論者は、國家の法律、制度、組織さへ改善されたならば吾々は絶對的自由の境涯に到達し得るであらうと信じて居るが、併し其れは空想である。精神は國家の制度、組織といふが如き外的なるものに依屬する間は尙ほ依他的である。即ち其自由は絶對的でない。精神は其れ自身に依て初めて完全なる自由を得うる。此段階は即ち絶對精神である。人は藝術、宗教、哲學に於て初めて完全なる自由、完全なる解脱を得る。

然らば絶對的精神の發現さへあつたならば客觀的精神、例へば其一段階たる國家は全然無用となるのであるか。ヘーゲルによれば左様でない。客觀的及び絶對的精神の兩者、否な絶對理性の凡ての發展段階は、相俟つて有機的體系を形造り、不離の關係を有する。大自然は極端に破壊的であると共に極端に保守的である。一方より見れば、自然、人事兩界の歴史は徹頭徹尾破壊の記録である、衝突、闘争、新陳代謝の連續である。併しその破壊せられた舊は高等なる新の中に永久に保存せらるゝ。(之はヘーゲルの辨證法の根本觀念であるが、併し此處にはその抽象的敘述を避けて具體的の例説に止める。)植物界が起つても礦物界は依然として存續する、而して植物界を支持培養する土臺となつて居る。動物界が起つても植物界は依然として存續する、而して動物界を支持榮養する基本材料となつて居る。而して動物界に於ても高級の類型があるにも拘らず低級の型類は存續する。最後に低級の動植物は高級の人類と並び存し、而して人類の生存を維持す

る基本材料となつて居る。精神界の諸段階に就て言ふも同様である。法が成立した後と雖も自己保存自己擴張種の保存等の本能は尙ほ其根柢に存して之を成立せしめる契機となつて居る。自己保存自己主張の本能あつて初めて財産も契約も刑も可能である。法が確實に成立つて其基礎の上に家族、社會、國家等の更に高等なる自由の發現は初めて可能である。而して斯の如き客觀的精神の基礎の上に自由の最高の發展たる絶對精神は初めて實現せられ得る。藝術、宗教、哲學等の高等なる文化は基礎強固なる國家の庇護の下に初めて榮え得る。斯くて自然精神兩界を通じての凡ての發展段階は嚴密なる有機的全體を形造り、一大建築を組立てゝ居る。若し其中の一段階にても取去るならば全建築は直ちに顛覆し、破壊せらるべきである。國家は文化の保持者、擁護者として初めて意味を有するのであるが、併しながら其文化の發展と共に存在の理由を失ふものではない。これが即ちヘーゲルの「文化國家」の思想の梗概である。

## 七

要するに、「ロマンテック」期の政治觀の根本觀念は理想主義的國家主義である。而して此の理想主義的國家主義はヘーゲルに至て最高發展に達し、徹底し、哲學的基礎の上に立つに至つた。其要旨は即ち、精神の本領は自由の發展にある、而して此自由の發展は各個人が各自勝手氣儘な意志に従つて行動するといふ段階よりして、自己の意志をば普遍的意志、即ち法律及び秩序に即して行動するといふ、段階、即ち國家に進むことによつて一段の進歩をなす、即ちより高き、より深き、より眞なる自由の段階に達する、しかし此段階は又た一層高き自由の段階、即ち藝術、宗教、哲學の基礎となつて初めて意味を有する、といふにある。而して此の理想主義的國家主義は對ナポレオン戰勝後暫くは普魯西を中心として獨逸の政治、教育等を支配する指導觀念となつた。前世紀より今日に互つて凡ての他の歐洲諸國（我邦までも）

の範となつて居る獨逸の教育制度の如き實に、其の基礎は此の時期に成立ち、而して此指導觀念に基いて考案せられたものである。然るに、ヘーゲルの死後間もなく、一般に理想主義的唯心論的の哲學に對して非理想主義的、唯物論的の反動が起つて來た。(此の反動が如何にして起つたかといふことは第一篇及び次の「獨逸の現代哲學と其最近背景参照」ヘーゲルの死後より前世紀の後半に亙つて獨逸に於て最廣く勢力を得た思想はフイエール・パッハに端を開き、カール・ラウグト、ビュヒネル等に至つて極端化した唯物論、シューベンハウエルの厭世哲學、カール・マルクス、エンゲル等の唯物史觀等であるが、是等の思想は其の中心問題や思惟動機や皈依やは非常に異つて居るが、併し理想の意義を否定する點に於ては皆な一致して居る。此中シューベンハウエルの厭世哲學は、理想を否定はするが併し禁欲的、出世間的の解脱教を説くものであるから其自身は必ずしも現實主義や物質主義に味方する者ではないが、併し宇宙人生の根柢は盲目的の生存欲であると見る思想

は、若し現實主義的思潮と結付くならば、極端なる、露骨なる現實主義的の主意説となるべき可能を有するものであるが、種々の事情は遂に此可能をば現實となしたのである。他の唯物論と唯物史觀とは、人を動かす根本的の力は唯物質的の欲望であり、歴史發展の根本的の勢力——單に物質的の方面に於ける社會状態のみならず宗教、藝術及學問等の精神活動までも動かすところの決定力——は經濟作用の外にはないと説く者であつて、徹頭徹尾、現實主義的の人生觀である。而して此唯物的、非理想主義的、現實主義的の思潮は非凡なる意力の英雄たるビスマルクの政治的の事功と結付いて前世紀七十年代以後は恐るべき勢力を以て獨逸を支配して今日に及んで居る。理想の尊重は力の崇拜と變つた。「文化國家」の理想は權力國家の理想と變つた。富と領有と、現實的成功とは個人並に國家の中心目的となつた。此傾向が思想上最鮮かなる形を取つて現はれたのは即ちニーッテの君主道徳説である(但しニーッテの思想は此の如き面のみならず盡されて居らぬといふことを特に



附加へて置く必要がある。

此滔々たる自然科学的、現實主義的、非理想的思潮(自然科学的思潮が如何にして非理想的思潮と結つくかは第一篇参照)に逆行して獨逸固有の理想主義を復興顯揚せんとした二三の思想家はあつた。其最顯著なる代表者はロッツェである。ロッツェは理想主義的思想を復興し、且つ之よりして放膽に失した「ロマンティック」的傾向を淘汰して自然科学的精神に背戻せざるやうに之を精鍊して新理想主義を説かんとしたが、併し其努力は獨逸思想の大勢を支配することは出来なかつた。彼の哲學は本國に於てよりも寧ろ英國に於て多く歡迎を受けて居る。ロッツェの影響を受けて起つたギンデルバン、ト、オイケン等(此兩家は共に直接ロッツェに就て學び其感化を受けて居る)の新理想主義も最近までは一般に認められなかつた。ヘーゲル哲學の研究の如きも亦た此間は獨逸に於ては殆ど閑却されて、却て英國に於て盛行はれて居る。獨りカント研究のみは七十年代よりして諸大學に行はれて居

るが、併しそれは當初は主として自然科学の基礎の批判としての其認識論の方面のみであつて、世界觀や人生觀に活用さるゝといふことは極めて少なかつた。それが世界觀や人生觀に適用さるゝ場合と雖も主として消極的、即ち唯物論の論駁といふが如きとに適用されて、積極的に理想主義的、人生觀、世界觀の建設には適用されなかつた。(第一篇及び次の「獨逸の現代哲學と其最近背景参照)而して如此方面すらも、其研究は殆ど全く大學内部に限られ、廣く獨逸の一般民衆の思想を支配する者は依然としてショーペンハウエル哲學や、唯物論や、ニーチエの君主道德説や、然らざるまでも自然科学的思潮の産物たる現實主義、自然主義であつた。今次の歐洲戰亂に於ける獨逸の行動が若し其敵國側の見るやうに軍國主義や領有慾の結果であるとするならば、それは少くとも或程度まではビスマルクの實行上の現實的、主意主義と思想上の此現實的主意説と相勢援しあつた結果として説明され得ると思ふ。

尤ども、今次の歐洲戰亂の發生に對して獨逸側又は「カイゼル」が其敵國側の言ふ様に責任の全體を負ふべきものであるか、又た所謂獨逸の「蠻行」なるものが敵國側に報道されつゝあるほど極端であるか、又た此の如き「蠻行」が唯獨逸側のみに限られて居るのであるかは尙ほ冷靜に考査せねばならぬ問題であるが、併しビスマルク以來の獨逸の實行思想兩方面に於ける一般傾向より察して、今日獨逸が受けつゝある道義上の非難は或程度までは正當ではないかと思はれる。理想を輕視したビスマルクの唯權力主義、唯精力主義は其當時に於て既に獨逸具眼者の憂國的警告の對象となつて居る。獨逸の「ドラディシナル」な理想主義を尊重する哲學者は言ふまでもないが、單にそのみに留まらない。史家ランケは獨逸の現狀に對して「一切は破滅しつゝある、何人も商業及び金錢以外のことを考へず」と慨嘆して居る。モムゼンは「兵力に於ても強固であり精神力に於ても強固であつた此邦に於て、精神力は消失して残るものは獨り軍國のみとならざるやう注意せよ」と

警告して居る。即ち是等の具眼者は、ビスマルクは強大なる軍隊を造つた、工業を盛にして物質上國を富ました、併し宗教改革やカントやゴッテやフヒテやヘーゲルによつて養成された獨逸魂は之が爲めに破滅に瀕しつゝある、といふことを痛切に感じ且つ憂へたのである。而して今次の戰亂は少くとも或程度までは、是等憂國者の憂へつゝあつたことが實現した結果ではあるまいか。

八

要するに前世紀中葉以後の獨逸思想界の缺陷は理想主義の不振であつた。自然科学的思考法が其正當の範圍を逸して萬事を支配した(第一篇参照)爲めに自然主義現實主義が勢力を得たといふことは此時期に於ける歐洲一般の現象であつたが、併し英佛兩國に於ては此現實主義、自然主義と相並んで理想主義が尙ほ相當の勢力を維持して居た。英國に於ては、前に述

べたやうに、カント、ヘーゲル、ロッセ等の獨逸の理想主義の哲學は其本國以上に盛に研究され、而して其流れを汲んだ哲學者は思想界の一方の大勢力となつて居る。ケヤード、グリーン、ブラッドレー及び其系統を引いた學者は、勢力の點に於て決してミル、スペンサー及び其系統を引いた自然主義を代表する學者に下つて居ない。而して單に専門學者間のみに止まらず、カーライルの如き文豪の筆を通して獨逸の理想主義的思想は一般の讀書社會に少なからざる感化を及ぼして居る。殊に、これは爲政の局に當るものは主として軍人及び法律家であるといふ同時期の獨逸に對しての著しき、コントラストであるが、バルフォア、ホルデーンの如き現存の有力なる政治家が獨逸の理想主義哲學の熱心なる學徒であり宣傳者である。佛國に於てもコムトの實證論の系統を引く自然主義派と並んで種々の理想主義的思想の學者及び學派があつて之に劣らぬ勢力を持続して居る。第一にルナンはヘーゲルに近き唯心論的汎神論の上に立つて理想主義を説き通俗的な

其文章の力を以て廣く社會を動かして居る。其の著「耶穌傳」は近世の哲學書中最多くの讀者を得たものゝ一であつて、出版後約四ヶ月間の發賣高が六萬に上つたといはれて居る。次にヘーゲルが「予は彼に看を與へた、而して彼は自身の「ソース」を以て之を調理した」と言つたギクトルクザンの折衷説を奉ずるベルソー、カロー、ジャーネー等の一派があつて、其思想は一時佛國の官學となつて教育上に重要な勢力を占め、其餘勢は世紀末近くまで持續して居る。世紀末に於てはカントの流れを汲むラシュリエ、ルヌーギエの一派主としてシェリングの影響を受けたラゾーソン、スクレタン等の一派は、一般公衆に對しては其れ程の勢力はなかつたが、併し學界に於ては實證派と對等の勢力を維持して居つた。然るに理想主義の發祥地たる、而して第十八世紀の自然科學的思潮の汎濫よりして理想を救護すべき道を指示したカントの郷土たる獨逸に於ては、理想主義は一時殆んど姿を隠し、偶現はれたことはあつても、其れは現實主義、自然主義にけおされて勢力を延ばす

ことは出来なかつた。而して思想界に於ける此缺陷は政治的事情と互に因となり果となつて生活の凡ての方面に於て一般に理想の無力といふ現象を誘致した。

私は吾が獨逸の留學者や旅行者が屢するやうな、教養を缺ける階級の獨逸人例へば下宿屋の家族や料理屋の給仕の如きもの、品性より推して獨逸人全般の品性を惡罵するに賛同することは出来ない。若し斯の如き標準に據るならば、吾々日本人と雖も之に類似した、或は之よりは更に甚しき批難を免れぬであらう。又た一般の英米人の獨逸人觀を直ちに信じて獨逸人を評價するも正當でないと思ふ。普通の英米人の獨逸人觀は恰かも西部北米人の日本人觀と同様、主として自國に於ける獨逸の出稼人や移住民やの人品や品性より歸納されたものであつて、一般獨逸人に對する評價としては當を得たものでない。尙又た獨逸人のかゝる缺點を指摘すること、伴つて彼等有する長所例へば勤勉規律の尊重、研究心の旺盛といふ

が如きまでも没却せんとすることには更に不同意である。獨逸人には今日尙ほ吾々が學ばねばならぬ多くの長處がある。併し、生存競争、所得、領有といふが如きことを過重して此目的を遂げんが爲めには手段を選ばぬといふが如き傾向が一般に勢力を得つゝあるといふことは否定することは出来ぬと思ふ。而して此傾向は全體としての國民の行動としては極端なる現實主義的軍國主義となつて現はれたのではあるまいか。而して之は單に外人たる吾々の觀察であるばかりでなく、前に述べたやうに獨逸の先覺者が夙に之を認めて居る。或は言ふものがあるかも知れぬ、其れは現代文明の大勢である、せち辛い世の中に於て終局の勝利を得るものはやがて斯の如き個人、斯の如き國家であると。さうであらうか。私は今日かゝる状態にあるところの獨逸が嘗て生み出した思想家の名に於て理想主義の哲學が成立し得、而して成立たねばならぬと信じ、又た理想が生活を支配せねばならぬ、而して實際支配するところの強き力であると信ずるものであ

る(第一篇末節参照)。現に今日の交戦國が自己を辯護し他を批判するに當つては常に正義人道といふが如き善の理想に訴へて居るではないか。又文化の擁護といふことを絶えず口にして居るではないか。或は言ふ者があるかも知れぬ其れは偽善であると。或程度まではさうであるかも知れぬ。併し偽善の行はるゝといふことが頓て善の力を示すではないか。善に力のないところに偽善の必要はないではないか。人が公々然善に反した行動を敢てすることの出来ないのは善の力を恐るゝ結果ではないか。

歴史的の國家を離れて理想的國家を求めたのは第十八世紀人の夢であつた。理想的國家はヘーゲルが説いたやうに唯特殊なる國民性を有する特殊なる國家の中に歴史的に部分的に實現する。史的國家を離れて理想の實現を説くは今日では腐儒の見となつた。併ながら、國家を離れての理想が空なる如く、理想を離れての國家は盲である。

現代の獨逸哲學に於ける顯著なる現象はカント、フイヒテ、ヘーゲル等の理

想主義的哲學の復興と之に關聯して起つた新理想主義の唱道とであつて、思想界に於ける前世紀中葉以後の缺陷は之に依て充たされんとしつゝあるのであるが、此思潮の積極的感化と今次の戦役より得らるべき消極的教訓とによつて其の實際生活に於ける缺陷も補はるゝに至るであらうか。(現代獨逸に於ける理想主義的思想復興の意義に就ては次の「現代の獨逸哲學と其最近背景」参照)或は、今次の戦役が戦争及び外交上に於ける獨逸の勝利を以て局を結んで現實主義、主意主義の成效を示すことによつて獨逸は益只管物質的に軍國的に勢力を擴張するに至るであらうか。私は獨逸の敵としてゝなく其味方として切に前者を希望する。

#### 四 獨逸の現代哲學と其最近背景

現代の獨逸哲學の重要な特徴として「ロマンテック」期に於ける唯心論的理想主義的哲學の復興を擧ぐるには何人も異論はない。此風潮の評價に至ては人に依て異なるかも知れない。之を以て前世紀中葉以後に於ける哲學的低潮が常態に復した結果であつて、一時邪逕に踏み迷つて居た哲學は之に依て初めて正道に復したのだと見るものもある。又之を以て科學進步の正當の結果たる實證的精神に背反する者とし、一時の變態的現象に過ぎないと見るものもある。例へば此復興思潮中の主な一派所謂西南獨逸學派の發祥地たるハイデルベルクに於ては自派の哲學をば新哲學と呼

んで自然科學派のヴント一派の哲學を舊哲學と呼んで居るが、ヴントの本據たるライプツィヒでは西南獨逸派の哲學をば却て舊哲學と呼んで之を唯の復古的反動に過ぎぬと見て輕蔑して居る。併し、一時閑却されて居たフヒテ、シェリング、ヘーゲル等の祖述的復活若くは史的研究が輓近勃興し始めたといふ事實は何人も否定しない。而して其史的研究と雖も多數の場合に於ては純粹なる史的興味のみで動かされた者でなくして、哲學的興味に動かされて居るといふこと、其研究は單に記述や説明や訓話解釋やに止まらずして、哲學的評價の精神が其根柢に動いて居るといふ事も否定出来ない事實である。此一篇の主な目的は前世紀初の唯心論的、理想主義的哲學と現代に於ける其の復興思潮との間の橋梁を架せんとするにある。而して其れが又た同時に一般に現代獨逸哲學の最近の背景を示すこととなり、而して其れが又たおのづから現代及び最新過去の獨逸に於ける諸哲學思想を互に關聯せしめて示すこととなると思ふ。之に依て獨逸哲學の現時

の一般傾向が幾分にも明かになり、且つ今日頻繁に吾邦に紹介されつゝある種々の獨逸の現代思想各自の特徴及び意義が幾分にも明かになるならば、此一篇の目的は達せられたのである。約一世紀に互れる間の哲學思想變遷の概観であつて、個々の哲學說の詳細な敘説は其目的でない。

二

第一に此復興運動の原因は主として何であるかを考へて見るに、最一般的な原因は、第一に一般文化に對する哲學の位置及び本分に關する、第二に之と密接に關聯して哲學と自然科学との關係に關する、前世紀初期の大思想家の態度が、哲學の現状或は前世紀後半以來の状態に慊らざる今日の多數の思想家に歡迎さるゝといふことにあると思ふ。もつとも此兩點に就ての哲學者の態度は思想の内容其者にも影響して來るのであるが、併し此内容に就ては復興運動の種々の代表者によつて傾向や意見を異にして居

に拘らず、今の二點に就て哲學が往時有して居た地位と權威とを回復せんと欲するといふだけは凡てが一致して居ると言へる。

前世紀初期の獨逸に於て本系を形造つて居る哲學、即ちフイヒテ、シェリング、ヘーゲル等の唯心論的體系に於ては、哲學は唯の認識論や倫理學や心理學ではなかつた。一方他の諸學問に對して統率的位置を占むると共に、他方世界觀、人生觀として萬有の意義、人生の目的及び理想を揭示して個人並に國家の精神生活に對して統率的位置を占むべきものとせられて居た。單に學問上に於てのみならず、宗教、政治、教育等の實際生活に對して指導的地位に立つべきものと考へられ、且つ現に實際生活の上に偉大なる權威を有して居つた。フイヒテでも、シェリングでも、ヘーゲルでも、シュライエルマッヘルでも、單なる書齋學者ではなくして廣い意味での一種の經世家であつた。而して時の政治家、宗教家、教育家等も亦た其指導を是等の哲學者が揭示した理想に仰いだ。殊に當時の著名なる政治家の多くは此理想を國政の調理

上に實現するを以て自己の本分と信じて居つた。「茲に是等の點に就て精細に叙説する暇はない。一方に於て是等の哲學者の閱歷及び學識を見、他方に於てバイエルンやプロイセンの當時の著名な政治家の事業の跡を見、たならば此事は直ちに首肯せらるゝであらう。尙ほ後者に就ては、プロイセン改革期に關するシュブランガーの研究、殊に其最近の著述ギルヘルム・フォン・フムボルトの下に行はれたるプロイセン教育制度の改革に關する研究は最も適切な參考材料であらう (E. Spangier, Wilhelm von Humboldt und die Reform des Bildungswesens, 1910)。此種の研究によればギルヘルム・フォン・フムボルトの教育制度改革は全然哲學的、體系的見地より企畫された者であるといふことが明かに判る。」即ち、哲學者は國家の立法者たらざる可からずといふプラトーンの理想は當時の獨逸に於て一部實現されて居たのである。無論プラトーン自身が説いたやうに哲學者自身が實際政治に執掌するといふ意味ではない。流石放膽なる「ロマンティック」の哲學者でも分業の

進歩を無視して思想家自ら政治の衝に當らねばならぬといふことは要求しなかつた。併し哲學者は人生指導の地位に立つて常に爲政家に文化の理想と規範とを掲げ示さなければならぬと考へられ、且つ實際に掲げ示して居つたのである。

然るに此時期に次で、前世紀の中葉頃より實證的自然科學の部分的研究が盛となると同時に哲學の低潮期を誘致した。哲學は極端に輕視されて哲學なる語は一般に空想と同義に解せらるゝに至つた。人は多く此哲學輕視の原因としてヘーゲル及び後期のシェリングの自然哲學的思辨が自然科學の細心なる經驗的研究を輕視して空想に走り放膽僭越に失せしことを擧げる。蓋し其れも有力なる一因に相違ないであらう。現にアレキサンダー・フォン・フムボルトが「自然哲學」に對する態度の變化の如き其一適例として擧げられ得ると思ふ。アレキサンダー・フォン・フムボルトが世紀初に於て亞米利加探検より歸つた時にはシェリングに向つて其「自然哲學」に多



大の興味を有する旨を告げて居るが、然るに四十年代、五十年代に至ては其同じ口よりしてシェリング後期の「自然哲學」の發展に對して皮肉極まる惡評を洩して居る。併し更に之よりも重要な、或は之を其一部分として含むところの更に大なる原因が哲學輕視の風潮を誘致して居るといふことを看過してはならぬと思ふ。前世紀初期の唯心論體系には共通なる二つの重要特徴がある。第一は自然に對する精神の優越の意識である。此意識の最強盛に現はれたのは言ふまでもなくフイヒテ哲學であるが、併しシェリング及びヘーゲルの哲學に於ても其れは重要な契機となつて居る。第二は崇高なる價值感情が高潮に達したりしことである。然るに第十九世紀の中葉頃に至て此兩點に於て全然正反對の風潮が起つた。實證論的自然科學的風潮の結果として機械的唯物的世界觀が勢力を得て、自然に對する精神の優越の意識に代つて其反對に其劣弱微小の意識が盛に起つて來た。精神は其自身意義を有せず、單に物質作用の副産物に過ぎぬと考へらるゝ

に至つた。高尚なる價值感情に代つて凡俗若くは低劣なる價值感情が勢力を占め來つた。人生、従つて萬有の目的は道德、宗教、藝術、哲學等の高尚なる文化の實現にありとせられたに反して、主として英國に起つた進化論的思潮、殊にダーキンの生存競争、自然淘汰、適者生存等の生物學的觀念の影響は一時緊張し切つて居た價值意識を弛解せしめた。斯くて學的世界觀としての唯心論、理想論は極端に輕視され、而して之と共に之と密接に結付いて居つた哲學其者までも輕蔑さるゝに至つた。

尙文化史的見地から見て興味ある事實は、唯物論的思潮が厭世思想と時を同うして勢力を逞うしたことである。ナポレオンに對する獨立戰爭後の獨逸が國民的精神勃興して陽々たる希望に充ちたりし間(即ち一八二〇年代)はヘーゲルの具象的理想論が獨逸の思想界を風靡して、其れに對抗して厭世主義を説いたショーペンハウエルは、著書は顧みられず、一私講師の椅子すら安全に保つ能はず、憤懣憂鬱の裡に生活を送つて居る。然るに一八

五八年、其七十一歳の誕辰には四方より寄せられた賀状は机上に堆く、幾多崇拜者の同情と尊敬の裡に涅槃に入つたのは一八六〇年であつた。シューベンハウエルに次いで近世厭世論の代表者たるハルトマンの著作的活動も實に此六〇年代を以て始まつた。而してヘーゲル派左黨の學者が唯物論的思想の鋒鏑を現はし始め、自然科学者が之に和し始めたのが、一八四〇年代で、其唯物論的思潮の最旺盛を極めたのは一八五〇—六〇年代である。斯く時代を同うして勢力を得た厭世論と唯物論との根柢には注意すべき共通の精神が動いて居る。自然科学の概念のみをもつて、徹頭徹尾價值の概念を離脱した世界觀、一切の人間の感情、人間的要求を離れた純理論的な世界觀を建設せんとするが唯物論の目的であつた。而して生活の價值を否定し、人間の理想、向上的努力の空なることを説くは厭世論である。之と關聯して尙ほ一つ兩説に共通な特徴は、歴史の意義を無視することである。唯物論は、冷酷な、人間の理想や願望やには全然無頓着な、永劫に同様なる事

を反覆し行くところの自然法の外に世界過程を支配する何者をも認めない。シューベンハウエルに對しても亦た、理想や目的を追求して努力するところの歴史的人類は一の悲喜劇の主人公であつて、生存意志の奸計に欺かれ、迷妄に囚はれた者である。要するに、理想の價值と、存在の意義と、向上的努力の效驗とを否定し、歴史の目的を無視するといふことは、唯物論と厭世論とに共通なる特徴である。而して其れは又恰も當時の獨逸の人心を支配して居つた根本的氣分であつた。獨逸統一の宿望空に歸して、さしも勃興したりし國民の元氣に一大頓挫を來たしたフランクフルト國民議會の開かれたのは一八四八年である。獨逸人は痛切に理想的精進の無意義、向上的努力の無效を味つた。此際の獨逸人がビュネルの「力と物質」やシューベンハウエルの解脱論の書を耽讀したのは實に自然の勢ひであると言はねばならぬ。一八二〇—三〇年代に於て獨逸思想界を風靡したヘーゲルはナポレオン撃退後に於ける獨逸國民的精神の旺盛とプロイセン國運の

勃興との好象徴である。一八五〇—六〇年代に至つて一大勢力となつたショーペンハウエルと唯物論者とは又た沈滞せる當時の獨逸人心の好代表者である。

然るに一八七〇年にはナポレオン三世セダンに降り、一八七一年にはギルヘルム一世エルサイユ宮に於て帝號を受け、獨逸帝國の建設が成つた。一時空に歸せんとせし獨逸民族の宿望は茲に充たされて、光輝に充てる陽春季は到來したのである。然らば此前後に於て、性質竝に規模の上に於て此光輝ある時期を代表するに足るべき哲學があつたかと尋ねれば、之を指名するに苦しむ。却つて世紀央の唯物論や厭世論が尙ほ餘勢を保つて居つたのである。蓋し變化した民族精神の自覺は其れ自身の力のみでは直ちに哲學として概念的認識の形を取つて表はれることは出来ない。一方認識其者の中に之に相應した發展の徑路が開かれて居ることを要する。認識其者の中に斯る發展の可能が與へられて居ることを要する。第十九

世紀初の國民的精神高揚期に於ける「ロマンテイク」の哲學に對して斯の如き可能を供給したものはカント哲學であつた。カントの認識論に於ける所謂「コペルニクス的轉回」は自然に對する精神の優越權を確保するのみならず、理性の自律といふことはカント哲學の全體に互つた中心觀念である。而して其三批判書に於ける先天綜合判斷の研究は、知、意、情の三面に互つての人間活動の理想又は規範の研究に外ならぬ。此點よりして、科學、道德、法、藝術、宗教等の高等なる精神的文化に批判的基礎を與へるといふことがカント哲學全般の目的であつたといへる。即ち、自然に對する精神の優越、理想的價值觀、文化の指導者としての哲學、といふが如き「ロマンテイク」哲學の中心觀念はカント哲學中に明瞭、若くは不明瞭に含まれて居たのである。之に反して前世紀後半に於ては斯の如く時代の要求に應じて發展し得べき哲學はない。唯物論と厭世論とは新時勢の要求とは全然反對したものである。其自身此時勢を代表すべき新哲學に發展の道を開き與へること

は出来ない。即ち注意はおのづから新國民生活状態にふさはしき性質を有する過去隆盛期の理想主義の哲學に向はざるを得ないのであつた。

## 三

併し世紀初と其後半との間には思想状態に顯著なる相違がある。それは即ち自然科学の勢力である。其結果として直ちに世紀初の「ロマンティック」期の放膽なる唯心論的體系に復歸することは到底不可能であつた。此に於て注意はおのづから過去に於ける大哲學中、自然科学と最密接な關係を有すると思惟され、放膽と飛躍とを嫌つて細慎精緻を旨とした、反形而上學的傾向に富むと考へられた者に向けられた。カント哲學の復興は即ち斯の如き事情に促されて起つたのである。但し此風潮の濫觴は既に第六十年代にある。否、其の第一の先鞭者は既に第三十年代にある。即ちフオールトラージェは其「ヘーゲル哲學の缺陷」Die Lücken des Hegelschen Systems

(一八三二)に於て「ヘーゲル哲學の缺陷を指斥し、之を補はんが爲めには、カントに歸らざる可らず」と説き、而してヘーゲルの門に出でたツェラー亦た之に和した。併し當時此主唱は未だ深く世の注意を惹くに至らなかつたが、一八六〇年、クローノー・フィッシャーがカントに關する著書を公にするに至り、久しく看過せられて居た批判哲學に對する世の注意を喚起し、更に「カントに歸れ」Zurück zu Kantの聲を高めた。之と相前後して、ヘルムホルツは其生理學研究の結果「純粹理性批判」の結果と契合する所あるを唱へた。オットー・リブマンは其「カント及び末流」Kant und die Epigonen (一八六五)に於てカント研究の忽せにせられたることを難じ、各章、其故にカントに歸らざる可らずとてふ疊句を以て結んで居る。アルベルト・ラングはその「唯物論史」(一八六六)に於て、カント哲學を祖述して唯物論を批評した。一八七〇年マイエルは「カントの心理學を」一八七一年ヘルマン・コーエンは「カントの經驗理説」Kants Theorie der Erfahrungを公にした。是等の有力なる鼓吹者を得て新カント運

動は思想界の一大勢力となつた。

新カント派運動の初期に於てカント哲學の如何なる面が主として重を置いて祖述されたかといふに、大體の下の四者が挙げられ得ると思ふ。第一、カントが反形而上學者であつたといふこと、超驗的對象の學としての形而上學の破壊者であつたといふこと、之が一時全盛を極めた思辨的形而上學に對する反動期に於てカント哲學が歡迎せられた第一の原因である。第二、第一と密接に關聯して、カントは近世認識論の創始者である、形而上學的思辨を排して之に代ふるに認識の限界問題、即ち吾々は何を知り能ふかの研究を以てした。此點が放膽と飛躍とを嫌つて細慎を重んじた此時期に於てカント哲學の復興を促した重要な原因の一である。此ことを最もよく示すものは前に挙げたオットー・リープマンの著書である。第三は、カント哲學の出發點が自然科学であるといふ點である。カントは單に其批判前初期に於て一時自ら自然科学の研究に専心し、且つ自然科学史上注目す

べき獨創の發見ありし(例へば星雲説の如し)のみならず、其批判哲學を建設した土臺も數學及び自然科学であつた。「純粹理性批判」の中心問題も、プロレゴメナの中心問題も、先天綜合判斷は如何にして可能なるかといふことであり、而してカントの意中に於ける先天綜合判斷は數學及び純粹自然科学であつた。即ちカントの認識論の中心問題は數學及び純粹自然科学に基礎を與へるといふことであつた。カントは其出發點よりして形而上學の可能は之を疑つて居るが、併し數學や純粹自然科学の可能は之を疑つて居ない、其れが可能なる事、其妥當の要求の正當なることは判明の事實であつて認識批判を待つて初めて決せらるべきことではない、批判哲學は寧ろ之を豫想して唯其れが如何にして可能なるかを考査する必要あるのみとした(純粹理性批判)で取つた方法、即ち體系的論述に際して取つた方法は此の如き者ではないと見る今日の歴史家でも、カントの心理的説明としては此解釋を是認する、カントの心理的説明として見らるべき「プロレゴメナ」で

取つた方法は是である。斯く自然科学に基礎を與へるといふことを哲學の主要目的の一として居るといふことが、自然科学的風潮の盛な當時にカント哲學が歓迎された重要な原因の一であつた。カント哲學の中心目的を此處に置く最よき代表者は初期のヘルマン・コーエンの思想である。第四にカント哲學は機械的唯物論々駁の武器として用ゐられた。カントは第一批判に於て空間の先天性を説いた。延長は主觀の形式である。物質が延長を離れて考ふ可からざるものである以上は、精神を物質より派生せんとする唯物論は主觀の所造たるものを以て主觀を説明せんとするものであつて本末を顛倒したものである。尙ほ又カントは、第二批判に於て現象界の必然を説くと共に可想界に於ける自由を承認し、第三批判に於て目的論をば理性必然的の考へ方(vernunftwendige Betrachtungsweise)として其可能のみならず必然をも認めた。是等の點に於てカント哲學は唯物論及び機械觀論駁の武器とされたのである。前世紀中葉の唯物論は學者間に永

く勢力を保つことは出来なかつたが通俗の間には尙ほ恐るべき勢力を有して居つた。理想主義的傾向を有する思想家はカント哲學に據つて此風潮に當らんとしたのである。カント哲學を唯物論々駁の武器とすることは殆んど凡てのカント學徒に共通であるが、併し之を中心としたのはアルベルト・ランゲの「唯物論史」である。

以上カント哲學復興當時の狀勢である。此狀勢は最よく、當時の哲學思想が唯物論には満足することは出来ないながらも而も之が根柢となつて居る自然科学の勢力を如何に強く受けて居るか、従つて又た反自然科学的傾向を有する世紀初の形而上學體系への復歸を如何に好まなかつたかを示して居る。其後今日に至るまでのカント運動の發展は大體下の三大流派に區別され得る。

第一の流派は體系的性質のもの、即ち狹義の新カント派である。狹義のカント派中にも種々の色分けがあるが、併し其凡てに互つて一つの強き確

信を認めることが出来る。其れは即ち、カント哲學は其頂末の點に就て言へば改竄すべきことが多い、併し其根本精神、中心觀念に於ては不朽である、既に哲學の極致に達して居る、其れ故に、吾々の任務は、此眞精神を發揮せんが爲にカント哲學中に存する之に矛盾する要素を排除し、其足らざる所を補充し、出來るだけ之を徹底した形に改造するに有ると考へることである。而して其所謂眞精神は何であるかといふに至れば、人により派によつて説を異にして居るが、併し其中に所謂認識論上のコペルニクスの轉回を含むといふ點に於ては、悉く一致して居る。即ち從來の哲學が認識概念を對象に適應せしめたに反してカントが對象を概念に適應せしめたことをばカントの不朽の成績と認むる點に於ては、此派の凡ての人が一致して居る。併し其他の點に於ては、カント哲學に特有な種々の概念の解釋の仕方によつてカント哲學に關する種々の異説が成立つて居る。殊に、物自體、現象意識一般、先驗統覺等の諸概念は學者によつて最も解釋を異にする者であつ

て、其解釋の如何によつて新カント派中に特徴を異にする種々の學派が過去に於ても又現在に於ても成立つて居る。其著しき代表者を舉ぐれば、實證論的傾向のリール、純實證論派のラーヌ、論理派のコーエン及びナイトルプ、所謂目的觀批判的方法に依つて普遍妥當的價値の研究をば哲學の中心問題とすることを以てカント哲學の眞精神と見るギンデルバント、リッケルト等である。是等種々の學派は大體カント解釋の相違に基いて起つたものだと言へる。注意すべきは新カント派が其初は前に述べた様に世紀初の形而上學に反對の傾向を示して居るのに反して、世紀末に近づき現世紀に入るに従つて漸次形而上學的傾向を加へ、或は少くとも純認識論の問題より漸次人生觀的思索に進み入つたことである。カント復興運動の初期に於ては主としてカントの認識論の様相のみが祖述されしに反して、コーエンは其體系を組織するに至て論理學に次で倫理學及び美學の體系を立て、ギンデルバントはカントの知、意、情の三面に互つての理性批判に等しく重

きを置いて居る。ギンデルマンによれば、カント哲學の中心問題は知意  
 情の三面に互つて先天綜合判斷の可能といふことである。先天綜合判斷  
 は認識意志若くは感情活動の公理である。眞善美の價值判斷の普遍妥當  
 的標準即ち規範である。即ちカント哲學の中心對象は普遍妥當的價值又  
 は規範である。或はカント哲學は規範意識又は最廣義に於ける良心の批  
 判である。或は、普遍妥當的であるといふことは眞善美の本質であるから、  
 哲學の問題は個我に働いては居るが併し普遍的な即ち超個人的な我の考  
 察である。而して超個人我はギンデルマンの宗教哲學に於ては、細慎な  
 批判的條件の下にはあるが形而上學化されて居る。斯くてギンデルマ  
 ンはカント哲學の眞精神の顯揚者を以て自ら任じつゝも、其思想の形式  
 内容共にフィヒテの傾向を帯びて來た。

併し、是等は決してカント自身をば此の如き意味での形而上學の主張者、  
 若くは同情者と見たのではない。寧ろカントの眞精神を徹底せしめんが

爲めにはカントの所説をば斯の如く改造せねばならぬと考へたのである。  
 併し此外にカント其人の中心目的が形而上學の建設にあつたとする解釋  
 がある。其代表者としてはパウルゼンが擧げられ得る。パウルゼンによ  
 ればカントを形而上學の唯の消極的批判者と見るは非常なる誤解である。  
 形而上學其ものを非認するといふことは決してカントの目的ではなかつ  
 た。カントが極力排斥したのは唯形而上學者中の一派、即ち第十八世紀の  
 唯理論的形而上學派である。従前の形而上學に對する此破邪的態度の一  
 面には強烈なる顯正的精神がある。即ち信仰に基礎を有する形而上學建  
 設の熱望である、とパウルゼンは見る。無論他のカント派の學者も此面を  
 否定するのではないが、併し彼等はカント哲學の中心動機と最大效績とを  
 此點に置かない、之に反して、パウルゼンはカント哲學の眞旨趣を此點に認  
 めるのである。即ちパウルゼンは「余は信仰に場所を與へんが爲めに知識  
 を破壊せざるを得ざりぬ、Ich musste das Wissen aufheben, um zum Glauben Platz



zu bekommen といふ語に重要な意義を認めた(カントの此句は色々解せらるるのであるが、バウルゼンは此句中の「知識」Wissenを唯理論的形而上學即ち認識能力の限界を超越した偽認識と解し、aufhebenを破壊といふ意に解して居る)。尤もバウルゼン自身の形而上學はカントの其れとは頗る性質を異にしたものである。又た他のカント派がカント説より發展した形而上學とも類似は極めて少ない。バウルゼンの形而上學はカント運動より後れて起つたスピノーザ運動後に説くべしと自然科学とが結びついたものである。

體系的性質の新カント派と密接に關聯して、専らカントの史的、文献的研究に従事する一派がある。この運動の開祖はヘルマン・コーエンであつて、従つて此運動は元と今述べた狹義の新カント派中に起つたのであるが、併し、史的、文献的研究が細微に進むに従つて此運動は漸次新カント派を離れた獨立の運動となつた。蓋し、史的研究はカント哲學に於ける種々の缺陷

と矛盾とを發見し忌憚なく之を暴露するに反して、カント哲學の復興を目的とする新カント派は自然出来るだけ是等の缺陷及び矛盾を補充調停し、出来るだけ矛盾なくカント哲學を解釋せんとする傾向を有する。兩者が分離したのは自然の結果である。カントの史的研究の目的は必ずしもカント哲學の再興ではない。カント哲學の史的成立の闡明が主なる目的である。而して文献的研究によつて種々の矛盾が發見されるれば、其れが又た刺激となつて史的研究を誘進する。殊に「純粹理性批判」中に發見された多くの矛盾はカントの批判的思想の成立史の研究に大なる刺激を與へて居る。此の如くしてカントの史的研究者、殊に輓近の史的研究者中には、カント哲學の諸方面に對する(及びその祖述に對して)活潑なる批評が起つて居る。史的研究派から出でてカント復興運動より脱したもの、最著しき例は有名なるカント註釋の著者ファイヒンゲルである。最近に出でたファイヒンゲルの著書「かのやうの哲學」が「ブラグマティズム」と類似した思想を含むと

こふことは、輒近我國の哲學界にも紹介されてをることである。人或は此一派をば唯の文献家として賤しむが併し文献的研究は凡ての他の史的研究にも必要であると等しく哲學史の研究にも必要である。史料の蒐集のみでは歴史は成立たぬ、史料に史家の魂が吹込まれて初めて歴史は成立つものであるが併しそれには先づ正確なる材料の詮索が必要である。主觀主義的史學觀の最有力な代表者たるリッケルトかベーコンの題句「自然は從順によつて征服される」(Natura parando vincitur)を移して「歴史は從順によつて征服される」と説きしは味あることである。フアイヘンゲルの大著「カント註解」がカントの眞理解に對する偉大なる成績は反文献家と雖も否定出來ない。殊に、此文献的研究は、初期に於ける新カント派の偏局的なカント祖述に對してカントの全體を闡明して哲學問題の偏局化を妨げ、新カント派其者の發展にも有力な刺激を興へたといふ成績は看過することは出來ぬ。見様によつては、或偏局的なカント祖述よりも却つてカント哲學の眞復興

に寄與して居ると言へるかも知れぬ。フアイヘンゲルのカント註解の如きは確かに、唯の古書研究といふ意味を離れ一般哲學研究に必須な豫備教課といふ意味を有して居る。

カント哲學の復興を目的とする新カント派、カントの史的研究を目的とする文献派と相並んで、嚴密科學者間にカントと密接に關聯して認識論的考察に従事した一派がある。其最顯著なる代表者はヘルムホルツ及びエーレンスト・マッパである。前者は後者に比してカントに忠實である。後者は、出發點は全然異なるが、結果は寧ろアヴェナーリウスの經驗批判論に合致した點が多い。此一派に共通な特徴は、嚴密科學の研究より哲學問題の考察に入り、反形而上學的傾向を有することである。其中心點は人生觀や世界觀でなくして認識論である。嚴密物理學の原理及方法の批判を以て哲學の中心問題とする。而して純粹經驗をば出來るだけ純粹に、即ち出來るだけ思惟の附加的要素より引離して、知識の成立に絶對的に必要なる假定や

概念の外は悉く排除することを主な目的とする。此傾向を最徹底して代表して居るものはマッハである。マッハの認識論上の立場は所謂經濟的認識論であつて、感覺論である。科學上の種々の概念、例へば物、因果力等の概念は常識が考へるやうに客觀の實在にも對應しない、尙ほカントが説いたやうに知性の必然の機能でもない、知性の方便概念である、思惟の經濟上より知性が生み出したものに過ぎない。従つて經濟的道具として必要なる間は存在の理由を有するが、其必要がなくなれば存在の理由を失ふ。例へば物自體、因果力等の概念は今日の科學上最早無用である。今日の物理學の任務は心理學の其れと等しく感覺内容をば毫も是等の概念によらずして函數的關係に整序するにある。

四

前世紀後半の獨逸に於て最も盛に復興された過去の哲學はカントであ

るが、併し之と竝んでスピノーザの復興もあつた。スピノーザに關しては史的研究、文献的研究はカントに關して程盛んではないが、併し哲學思想其ものに及ぼしたスピノーザの影響は決してカントに劣らない。フエヒネル、パウルゼン、ヴントの三家は直接間接にスピノーザの影響を受けた最顯著な哲學者である。

是等の學者は其中心問題を認識論に置かない。大體上心身の關係に關する精神物理的考察より出發して形而上學に入るといふのが其の著しい共通點である。精神物理的考察によつて並行論が正當と認められるれば一般に身心間の因果關係が否定さるゝから、身心因果説たる唯物論も亦従つて否定されねばならぬ譯である。併し其並行論が單に精神物理的に止る間は尙ほ唯物論的傾向を脱することは出来ない。何故なれば、世界の大部分は外感に對しては唯の物質である。精神現象は唯其一極小部分の伴起現象として之に並行して起る、いはゞ偶然的現象に過ぎない。併し、若しス

スピノーザが説いた様に物身の並行は單に人間、或は更に廣くして生物界のみに限られて居ない、有機無機兩界に互て存すると見、而して此思想をばカントの觀念論と結付ければ、茲に一種の唯心論が成立つて來る。此點に於てスピノーザの普遍的並行論は、哲學問題を認識論に局限する事に慊らず、而かも唯物論的世界觀にも満足し得ない一部の哲學的要求に投じた。

併し、スピノーザの復興に對して重要な意義を有する尙ほ他の一契機がある。それは汎神論、即ち萬有一體觀である。スピノーザ哲學の此方面に最重要なる意義を認め、之を哲學、殊に宗教哲學の中心觀念としたのは世紀初に、於てはシュライエルマッヘルであつた。シュライエルマッヘルの宗教觀の特徴は、宗教の本體を絶對依憑の感情としたのであるが、彼は此感情の形而上學的根據をスピノーザ風の汎神觀に求めた。以後此觀念は獨逸の進歩的傾向を有する多くの宗教哲學者及び神學者間に有力な傾向となつて居る。フヒネル、パウレン、ヴント等の哲學者も亦た此點に於て大體一致し

て居る。實に前世紀後半の自然科學的時期に於ては汎神論が唯一の形而上學であつたと言つても過言でない。苟くも自然科學の内部に、若くは自然科學と調和して、形而上學的、宗教的要求を充たすに足るべき深遠なる世界觀に對する要求の起る場合には、人は必ず並行論的汎神觀に赴くと言ふが一時の形勢であつた。

## 五

カント復興及びスピノーザ復興と相並んで尙ほ注意す可き重要な哲學者の一群がある。其代表者としては、ハルトマン、ロツツモイケン、デイルタイ等が挙げられねばならぬ。是等の哲學者は其哲學の方法、内容に於ては互に非常な懸隔があるが、併し重要な點に於て一致がある。即ち彼等は何れも特に或特別な過去の哲學を祖述せず、而かも反哲學的風潮に反抗して獨逸特有の唯心論的、理想主義的哲學の命脈を維持せんと努力して居る點に

於て一致して居る。但し彼等と雖も自然科学全盛時代の影響を悉くは脱し得て居ない。殊にハルトマン及ロッツェ二家の哲學は多くの基本材料を自然科学に仰いで居る。併し哲學的思索の奥底に潜んで彼等を動かして居るものは前世初紀の大思想家を動かした一種の理想主義的情熱崇高なる價值感情である。

第一に、ハルトマンに就て見る。ハルトマンの出發點は自然科学である。廣く物理、生物、心理諸學の事實を自然科学的、歸納的に整理して、而かも思辨的の形而上學的歸結に到達するといふこと、自然科学的經驗から出發して之を超越するといふことが其方法の根本特徴である。次に哲學說の内容に就て言へば、ハルトマン哲學の重要な特徴は人も知る如くショーペンハウエルの厭世論とヘーゲルの發展論とを綜合して發展的厭世觀を説き、ショーペンハウエルの汎理論とヘーゲルの汎理論とを調和せんが爲めに意志と理性とを二屬性とする「無意識」の宇宙原理を立てしことである。今是等の

點に深く立入る必要は無い。茲には唯、此「無意識」の概念の適用としての生活力論的有機界觀が現代の自然科学者の一部に復興され、新生活力論 (Vitalismus) となつて居るといふことに就て一言して置きたい。

自然科学者の一部は唯物論者となつた。唯物論に走らざる者でも一般に反形而上學的傾向を有し、殊にカント運動に連結せる自然科学者の哲學が極端な感覺論となつたことは前に述べた。自然科学より出發して唯、心論的の形而上學を説いたものでもロッツェの如きは機械觀を承認して居る。如何に高等な有機體と雖も、如何に複雑な生活現象と雖も、無機界と同様な理化學的作用として、理化學的法則により説明され得なければならぬと見て居る(ロッツェに就ては次に説く)。然るに前世紀の終末、今世紀の始頃より自然科学者の間に、機械觀に反對した形而上學的傾向を有する一派が現はれた。所謂新生活力論は其である。此一派によれば、有機體は純粹に理化學的に説明することは出来ない、高等の有機物、隨て人間の活動と雖も無機物

の活動と單復の量差はあるが類差はないと見る自然科学者通有の見解は誤つて居る。有機界に於ては物理力及化學力の外に「生活力」を認むるに非ざれば其説明は不可能である。此派の代表者と見る可きはラインケ及びドリーシである。ドリーシはハイデルベルクの理科大学に教鞭を執りつゝ哲學問題を講じ、新生活力論に關する論文、著述を公にし、少壯學者の之に和する者も少くは無い。此運動は遠くはアリストテレスの「エンテレヒ」の概念の復興とも見るべきであるが、近くはハルトマンの「無意識」の概念によつての有機界の説明を復興したものである。

第二にロツツェの起點も亦たハルトマンのと等しく主として自然科学である。否な「生活力」の概念を全然生物學より驅逐して生活現象と雖も悉く普通の理化學的作用として説明されねばならぬと説きし點に於て「生活力」を認めたハルトマンよりは更に多く自然科学全盛期の影響を受けて居ることを示して居る。併し當時勢力を得て居つた厭世論に反對して理想主義

を主張する點に於て、理想の信仰が其の哲學の根本動機となつて居るといふ點に於ては、ハルトマンに比して前世紀初期の唯心論的諸體系の影響が多い。彼れ自身の説くところによれば、彼れの哲學の目的は、實證科學の結果を人性の情意に根ざせる宗教的形而上學要求と融和するにある。従つて其體系はライブニツの其れと等しく機械觀と目的觀との調和である。宇宙過程は有機界を包括して徹頭徹尾機械的である。併し此機械的作用の最後の目的と結果とは神的理念の實現である。現實の根據は理想である。あるものゝ根據はあらねばならぬものに求めねばならぬ。即ちロツツェは、一方第十九世紀初の「ロマンティック」期の唯心論、理想主義の相續者たり、他方現代の新理想主義、新浪漫主義の前驅者たると共に、其思想には又た第十九世紀後半の自然科学的風潮をも最よく反映して居る。尙ほロツツェは、自然哲學と並んでヘーゲル以後久しく中絶して居つた歴史哲學の研究を中興した學者として注意を要する。ハルトマンは歴史哲學の著述を書かんとし

たが志を果さずして逝いた。次にロツツェが當時の自然科学的風潮に對抗して過去の獨逸理想主義を復興したことに對する他の顯著な一事例は、復合的精神觀を排してライブニツツの「モナド論」を取ったことである。第十八世紀及び前世紀後半に於ける自然科学的の考へ方によれば、精神的個體、意識的統一は、孤立して存在し得る個々の作用の集團に過ぎない。併しロツツェによれば、各心意作用は個々の意識状態を通じて同一なる純一的な「我」の状態である。其他、心身の關係、空間の現象性等に關するロツツェの考へ方も亦たライブニツツの其れに似通うた點が頗る多い。要するに、自然科学全盛期に在つて第十九世紀初若くは尙ほ以前の唯心論、理想主義の哲學を中興して後期の新理想主義、新ロマン主義の誘導者となつたロツツェの成績は偉大である。オイケンも、ギンデルバントも共にロツツェに就て學び、思想上其感化の大なることは否定出来ない。リッケルトは、予は尙ほ常に、あるものゝ根據をあらねばならぬものゝ中に求むるに當つて正道にありと確信すといふロツツェの語

を其主著「自然科学的概念構成の限界」中の一節の銘語となして、ロツツェの中心觀念が頓て自己の中心觀念であることを明示して居る。

次に擧ぐべきはオイケンである。實證科學と宗教的形而上學的要求との均衡はオイケンに至て全然破れた。ロツツェ哲學の半面たりし自然論的機械觀の様相はオイケンに至て全然淘汰された。オイケンの出發點は自然科学でなくして徹頭徹尾精神生活の内的經驗である。「人は高級の生活階段に於て、道德的行動に於て、藝術的創造に於て、學的思惟に於て、直接形而上的超越的世界に接觸する、超主觀的の心靈界との交路が開ける、吾々の意識に超世界的超現實的の契機が宿り來る、唯人間的 (Menschlich) 境涯は變じて神的境涯となる。」オイケンは此形而上學的觀念をば靈感、忘我等の内的經驗の事實に訴へて例證せんとして居る。是等の状態に於て實驗者は何等か新しき超越的な、超現實的な何者かに直接接觸する。但し多くの難者はオイケンの思想に認識論的基礎を缺くといふことを指摘して、オ

イケン哲學は哲學に非ずして説教だといふ。蓋し嚴密なる哲學の概念よりすれば此非難は正當であらう。併しオイケンの思想其者の内部には矛盾はない。何となれば、オイケンによれば、此の如き超越的經驗の嚴密なる論理的證明がなければ之を信じ得ないといふ者は言はゞ自己の哲學に對し無縁の衆生である、此の如き經驗は身自ら之を體驗することによつて之を直證するより外はない、之を信ぜざる者に對して嚴密に論理的な證明は不可能である。此點に於てオイケンの思想はフヒテの其れと密接な類縁を有する。オイケンは即ち吾々に一種の哲學的の創造的行動(Thathandlung)を督促喚求 auffordern するのである。斯る超越界の實在は與へられた事實でもなく、又た他の既定眞理よりして論證派生さるべきことでもない、人々自ら創造すべき行動である。人は須く第一に自己の決意發心によつて自己を心靈生活の段階に高め、心靈生活を直驗すべし、然らば超越界との接觸は實現されて、斯る世界の實在はおのづから直證されるであらう、哲學は之

を事實として示すことも出來ず、はた論證することも出來ず、唯人を斯る發心に鼓舞し得るのみ、といふがオイケンの根本思想である。

最後に擧ぐべき獨立思想家はギルヘルム・ディルタイである。ディルタイの生涯の主要部分は自然科学の全盛期と附合する。而して此間「精神科學」の孤城を守つて自然科学的思惟法に對して健闘し、輓近に到るまで僅かに少數の専門家の間に認められたのみなるに拘らず毅然として時流に逆行して居る。ディルタイはハルトマン、ロッツェの如く自然科学に讓歩をもしない。又たオイケンの如く神祕にも隠れない。而して其聲名は甚だ隆んでない。世紀半前後の哲學衰頹期に於て哲學の爲めに苦節を守つた點に於て恐くディルタイの右に出る者は少いであらう。ディルタイは如何なる形而上學體系をも組織して居ない。形而上學に對するディルタイの態度は全然懷疑論的又は相對論的である。彼れの初期の思想によれば形而上學は不可能である。彼によれば形而上學の理想は論理的の世界聯結である。併し現實



の世界は多くの矛盾を含み、非理性的非論理的であつて、此理想に矛盾する、従つて形而上學は成立し得ない。後期に至つて彼は世界觀の根本的標型として、自由の唯心論、客觀的唯心論及び實證論の三者を擧げ、此三者は相竝んで成立し得ると見て居る。オエステルライヒは、カントが第十八世紀末に於て嚴密自然科學を總括して合理的批判論を説きしに對して、デイルタイは第十九世紀末に於て大體此世紀の特發とも稱すべき歴史的研究を總括して懷疑的不合理論を説いたと言つて居る。此點に於てデイルタイは第十九世紀初の大形而上學體系思潮とは反對の方向を取つて居る。併しデイルタイは自然科學萬能の風潮に反抗して、極力自然科學的方法を精神科學の研究に適用するを排し、精神科學には固有の基礎と方法とを要することを固く主張した點に於て第十九世紀初の唯心論と一致し現代の理想主義殊に新カント派を豫示する。一切の精神科學の基礎は內的體驗と他人の精神活動の間接の了解とである。従つて精神科學の基礎學は心理學で、歴史的

研究之を補助しなければならぬ。併し普通の心理學は心意生活に関する種々の假説、例へば精神物理的並行論、決定論、無意識表象といふが如き假説を含んで居るが、併し此の如き假説の正否は自然科學上の假説の如く正確に驗證するすることは出來ぬ。従て心理學を精神科學の基礎とせんが爲には是等一切の假説を避けて唯、記述的分析的に止めなければならぬ。前にも述べた様にデイルタイの價値は今日尙ほ廣く認められて居ない。併し其綿密な史的研究と犀利な心理考察とは其歿(一九一二年)後次第に注意を惹き、其哲學史上に於ける效績は次第に一般に認められつゝある。

前世紀初より現代までの哲學思想の變遷は何を示すか。哲學の起點には外界と精神と二つある。自然界を起點に選び若くは自然研究の比論を以て精神界に臨めば、機械觀、自然論の傾向が伴ふ。精神界より出發すれば唯心論、理想主義の哲學が成立つ。併し直接の經驗に與へらるゝ世界は精

神界であつて自然界は考へられた世界、言はゞ翻譯された世界である。前世紀後半の哲學的思索の殆ど凡ては自然界を出發點とした。併し世紀末に近づくに隨つて精神界に立脚するものが徐々増加し來つて、現今に於ける唯心論、理想主義の復興となつて居る。而して之と共に一般文化に對する哲學の使命の自覺が高まつて來た。理想は心意生活の評價原理であると共に決定原理である。即ち創造の力である。理想の意識には必ず之を實現せねばならぬといふ心理的強制が伴ふ。これは理想の本性である。従つて理想を信ずると共に之をば研究の對象とするところの理想主義の哲學は必然的に人生の批判者たると共に指導者である。即ちプラトーンの説いたやうに國家の統率者、ニーチェの説くが如く文化の凡ての方面に互つての立法者でなければならぬ。哲學者は同時に廣き意味に於て經世家でなければならぬ。無論プラトーンの理想は今日に於ては文字通りには實現することは出來ない。時勢に應じて形を變へねばならぬ。フィヒテ、シ

リング、ヘーゲルが古代希臘に於てプラトーンが説いたとは違つた形で文化の立法者であつたと同様に、第二十世紀の哲學者も第十九世紀初とは異つた形で文化の立法者でなければならぬ。「併し哲學は文化の凡ての方面に互つて理想と規範とを標示すべきものであるといふことは哲學の本領よりして離すべからざる使命であつて永恆變るべきでない。之が獨逸現代の特徴たる理想主義の復興を支配して居る精神である。自然科学的思想法よりの獨立理想の信仰、哲學の人生指導の使命、此三項は互に不可離的に結付いて居る理想主義復興思潮の三主要因素である。

## 近世に於ける「我」の自覚史 終

大正五年一月一日印  
 大正五年三月十五日增訂再版發行  
 大正十一年十月十五日訂正五版印刷  
 大正十一年十月十五日訂正五版發行

改正  
 定價金參圓五拾錢

著者 朝永三十郎

發行者 大葉久吉

印刷者 渡邊八太郎

不許  
 近世に於ける  
 我の自覺史  
 複製

東京市日本橋區本石町二丁目十五番地

東京市牛込區櫻町七番地

日清印刷株式會社印刷

發行所 東京市日本橋區本石町二丁目二番  
 東京寶文館

關西專賣 大阪市西區阿波堀通四丁目三番  
 大阪寶文館

東京實文館發行書目

東京帝國大學 今 福 忍著

論辯學奧義

布裝全一冊  
定價金壹圓七拾錢  
送料金八錢

本書は斯學の大家今福先生苦心の著にして其名の示す如く論場必携の書なり、叙する所極めて詳細、而かも東洋の論理たる因明をも融和して、渾然たる論辯の一系統を組織す。苟くも此活社會に言論を以て立たんとするものは是非一本を備へて明快なる論旨の下に主張、論破以て社會に自己の存在を示さんこと處世上の奥義たるべし。敢て學生・教師・政治家其他各位に薦む。

東京高師教授文學博士 吉田 靜 致 共著

國民道德要領

布裝全一冊  
定價金貳圓五拾錢  
送料金拾貳錢

世界の亂に當り將た將來に亘つて、我國運の發展を圖り、歐米列國との競争場裡に優勝者たらんには、國民道德の振興を以て、其根本條件とすべし。弊館乃ち倫理の學に造詣深く、國民道德の研究に熱心なる著者に請うて本書を公にせり。一般人士の必讀書たるは勿論、文部省檢定受驗者の參考書として無二の良書なり。

東京帝國大學 今 福 忍著

論理學要義

布裝全一冊  
定價金參圓八拾錢  
送料金拾八錢

著者は論理學專攻の大家として最も重きを斯界に置かるゝの士、其の明晰なる眼識を以て多年研鑽の結果に成る本書を公にせらる。必ずや從來坊間に行はるゝ類書と其選を異にし、傑出する所あるべきや論なし。されば斯學研究者は勿論教育家・政治家其他法曹界の人士に對し無二の良參考書たるべし。

東京帝大高師教授文學博士 吉田 文 壽 共著

家族制度の將來

布裝全一冊  
定價金貳圓七拾錢  
送料金拾八錢

我國家族制度研究の必要なることは、幾多の學者識者の間に唱へられ、朝野人士の研究する所なり。本書は即ち此重要なる問題を闡明せんが爲めに公にせられたるものにして、家族の意義・種類・要素・家長權・家族制度の變遷等を古今東西に涉りて詳にし終に新家族制度の如何なるかを説き、將來の家族制度を論斷したる等巨細事項を詳述して餘蘊なし。

133  
To 62  
2

終

